を敎へたり、然れども彼等は「眞理」即ち所造物の創造者を求めず。是故に又彼に遭はざるなり。彼等若遭はゞ神を知る、尙且彼を神と崇めず、且謝せず、反つて其思念を亂し、自ら智者と稱へながら、爾の性質を己に歸したり。是故に其の盲目の邪見に由りて、更に己の性質を神に歸し。眞理なる爾の頭に虛妄を重ね、朽つべからざる神の榮光を變へて、朽つべき人、又鳥、又獸、又昆蟲の像に似せ造り、爾の眞相を虛僞に代へ、所造物を崇め奉りて之が創造者の上に置く。

尙且我は所造物に關して哲學者の眞正なる言說の多くを記憶す、我其の推測に、四時の順序に、星宿の顯證に、理由あるを發見したり。之を以てマニ敎の敎義と較ぶれば、マニ敎は此等の事物に於て無數の虛妄を其の浩瀚なる書冊に著はせり。二至、二分、月蝕其他我が世俗の哲學書に學びし所の事物に就き、何等の理由を見得ざりき。我唯信ずべく命せられたり、然れども諸說區々にして一致せず、否此等諸說は敎學其他

吾が目の見證に由りて立てたる條理ある學說と矛盾せり。

第四章

神を知る智識のみ、獨能く人を幸福ならしむ。

嗚呼、主眞理の神、人は此等の事物を知るが故に神に悅ばるべき乎。否此等を知りて爾を知らざる人は不幸なり。此等を知らざるも爾を知る者は幸福なり。爾と併せて此等を知る者も、其の智識の爲に、優りて幸福なること無し。人若爾を神として識り、爾を榮め、爾に謝し、而して其の思念を表はさんには、唯神獨り彼の祝福と爲りたまはん。

一本の果木を有し、其の使用權の爲に神に感謝する人は、設令其の木の高幾尺、其幅幾何なるを知らざるも、彼の之を測量して、其の一切の枝を算へながら、尙且其の木を所有せず、其の創造者を知らず、愛せざる人よ

りは愈れり。故に忠信なる人は、萬物の服仕する爾と一體なるに由りて一切萬寶の世界の附屬し、何等有つ所の物無きも萬物を有てる者なり、彼は太白星の旋轉すらも知らざれど、彼の蒼空を測量し星辰を數へ、元素を衡りながら、尺度と數量と重量とを以て萬物を齊へたる所の爾を省みざる者よりも愈に愈れり、――之を疑ふは愚なるかな。

第五章

星辰に關するマニ教の無稽、彼をして其の他の事物を信ずるに足らざらしむ。

然れど誰か此のマニ教者(ファウスト)に請ふて、其の敬虔的智識の幇助とならざる事物を書かしむる者あらん乎。蓋は爾吾人に告げて、「見よ敬虔は智慧なり」と言ひたまひし故なり。彼縱令完全に他の事物を知

悉したりしにせよ、此の敬虔に就ては無學無識なりしならん、否當然無學無識なりき。然らずんば彼若く鋏面皮に其の知らざる所の事物を他に教へんと試みるが如きこと無かりしならん。蓋は虛飾せる此の世の智識は、其の健全なる時だにすら虛妄の外あらざればなり。敬虔とは爾に向ひて告白する事なり、彼其の敬虔より離れ去れり。全體彼の識者らしき容貌は、唯彼が其の知れりと自稱する事物に對する無識に由りて、他の幽玄なる事物の智識に於て如何に其の信ずべからざるかを、眞の識者をして感せしむるに過ぎざるなり。實にや彼は己の上に寡小ならざる價値を附け、聖靈、即ち訓慰師、即ち爾に忠信なる者を富ます者が、人格的に、無限の威能を以て己の內に住めることを說いて、人をして之を信ぜしめんと努めりき。

是故に彼蒼穹に就き、星辰に就き、日や月の運行に就き、明瞭なる錯誤を發見されし場合に當つては、此等は設令何等信仰個條に非ざる物なが

ら、此人の不敬なる臆斷は、太だ明白とならざるを得ず。蓋は獨其の知らざる事物を人に敎ふるのみならず、更に實際虛妄なりし事物を敎へ、之を敎ふるに己の言說に、神人の言說の權威を主張するほど、然く狂愚なる驕慢を以てせし故なり。無學なる基督信者が、妄に學問の事物を語るを聞くとき、我猶能く彼の無用なる論說を忍容し得、而して其人が萬物の創造者なる爾に就て、無益なる事物を信ぜざる間は、我は彼が物質的の所造物に對し、「十範疇」を適用すべきの道を知らざればとて、彼の過失あるを見ざるなり。若彼此等の疑問が信條の本義に關することを考へ、若くは其の知らざる事物を獨斷的に斷言するとき、茲に始て其の過失あるを見るのみ。

然も此等の柔弱すらも、尙且「慈悲」てふ母(神)は信仰の嬰兒に對して之を容し、其の新人が長成して大人となり、復た諸種の敎理の風に吹き動かされざるに至るを待つ。然れどもファウストの場合に在つては敎師

先生監督、其の他己の說敎を聽問する大衆の巨魁たることを以て滿足せず、大膽にも其の信者に告げて、彼等の己が身に追隨するは、尋常の人に追從するに非ず、爾の聖靈に追隨するなりと曰へり。若彼一旦其の錯誤に就て思ひ當らば、此かる狂愚なる驕慢が、全き、恐るべき擯斥を買ふは確實の事なり。然れども我は晝夜の更迭、晝夜の長短の更迭、日月の缺蝕、其他我が他書に於て讀みたりし同種の事物に關する疑問が、悉く彼の所說に由りて說明せらるゝや否を研窮すべく、未だ全く吾が心を確定せざりき。若其の然く說明し得られたらんには、我は彼が此等の諸點に於て正當なりや否やに就き疑問を懷くべかりしなり。然れど我は唯神聖と稱はれし彼の名譽の爲、彼の權威に對して吾が信仰を犧牲とせざるべからざりき。

第六章

ファウストは能辯なりしも、世間的教育に飽くる所ありき。

我が不定なる心狀を以てマニ教に傾耳したりし滿九個年の間、我はファウストの到來を待望したりき。蓋は大凡此宗派の會員にして、我が遭遇したるほどの者は、吾が博物學の疑問に對して其の解決を與ふる能はざること明かなるに當りて、皆均しく我を彼に委ねしが故なり。彼等皆均しく曰ふ、彼將に來らんとす、然れば若君其の有らふる疑問を、――君だに提出するを欲せば、如何なる大問題にても――彼に語らば、鮮明に解說さるべしと。ファウストの來るに及んで、我彼を、魔力ある風采に喜ぶべき應對を兼ねたる人と見取りぬ。其の言說する所、正に他の人々の言說する所に同じ。然も彼の之を言ふや、數等趣味ある語法を以てせり。膳夫は實に閑雅なりき。杯爵は實に高貴なりき。然

も吾が飢渴は依然として殘れり。吾が耳既に此等の事物に飽かされたり。今此等が其巧に說かるゝが爲に、前より優りて見ゆるに非ず、其の修辭學法を衣たるが爲に、前よりも眞なるにも非ず、又彼其人智く見え、其の演說喜ぶべきが故に、彼の靈魂を智なりと考ふる能はざりき、且夫彼の己を彼に從へたりし輩は、正確なる判斷を有たざりしなり。彼等は其の能辯己を喜ばしゝ故に、彼を能者、智人と思ひ做したり。同時に我又他の種類の人あるを感じぬ。彼等は猜疑を以て眞理を見、若其の修飾せる、且流麗なる言語を以て發せらるゝときは、之を納けざらんとする者なり（此れ自ら辨疏せるなり）。然れども神秘、測る可らざる道を以て既に我を敎へたりしは、即ち吾が神なる爾なり。我己を敎へし者の爾なりしを信ず、蓋は其の眞理なりしが故なり。蓋は眞理は何處に又何處より照し出たるに拘らず、之が敎師たらん者は爾より外無ければなり。我既に爾よりして此等の事項を學べり。曰く何等の

事物も其の巧に叙べられたるが爲に眞理と見ゆべきに非ず、又言語の符號の蕪雜なるが爲に虛妄と見ゆべきにも非ずと。然れども又曰く何等の事物も、粗莽に傳へられたるが爲に必ずしも眞實なるに非ず。又其の說法の絢爛なるが故に虛僞なるに非ず。又曰く智愚は猶有益又有害なる食物の如し。此の兩種の食物は、各自に金碗にも、瓦皿にも、即ち貴き屬辭にも、賤き屬辭にも盛らるゝなりと。是故に久しくフアウストを待望せし後、我先づ其の嫻雅なる態度と、容易なる同情と、其の思想を然く便捷に裝ひ出す其の便巧なる言語に喜ばされたり。然り我他の人々の如く、否彼等以上に喜ばされたり。我彼を美め且崇めぬ。尙且我聽衆滿ちたる講義室に於て、吾が疑問を、親しき會話、又議論の接戰に於て彼に提出するを許さるゝを得ざりしを煩悶しぬ。我が其の機會を發見し、吾が朋友の面前に於て彼に問ふこと無禮ならざりし場合に於て、彼の傾耳を得しや否、我彼の前に吾が疑問の若干を提

出したり。我即時に彼が文典の智識の外、何等世間的技藝の彩色を有せざりしこと、其の文典すらも普通の智識に過ぎざりしことを看破したり。彼唯僅にシセロの演說の數篇と、セネカの論說の數篇と、稀に詩歌を讀みし外は、能文の羅典語にて書かれし其の宗派の書籍を讀みしに過ぎず。其の演說の日日の實習によりて增補されしに過ぎざる此の淺膚なる學問が、彼の能辨の惟一の資料なりき。其の稀薄なる資料が、頓智と天性の溫雅とに由りて、此の魔力と誘惑力とを生じたりしなり。嗚呼是れ果して我が記憶する所の如くなりし乎。主吾が神吾爾が良心の裁判官よ、吾が心、吾が記憶、凡爾の前に在り。爾は當時爾の摭理の秘密なる感動に由りて我を導き、吾が面前に吾が醜づべき過失を置きつゝありき。我が見て之を憎まんが爲なり。

第七章

彼如何にマニ教より解き放されしか。

我ファウストが卓絶せりと思惟したりし其の學術に於て、其の全く未熟なりしを審にするや、我は己を煩はせし難問を彼に由りて解決せんとの一切の希望を棄てたり。我謂へらく此の如き無識は彼をして若マニ教者たらざらしめば、必ずしも其の宗教上の信仰の堅實に影響すると無けんと。マニ教の書籍は、蒼穹、星辰、日月に關する無窮の怪談にて充てり。我我が某所に於て學びたりし數學上の議論を以て大に彼と戰ひ、マニ教の見解の正當なりしか、少くとも辯護するに足るべき物なりしかを研覈せんと欲しゝかど、我復や彼が學術的に事物を說明し得べしと待望せざりき。然れど我が考察と、議論を經べき諸の疑點を提出するに當り、彼は對するに謙遜を以てし、其の事業に從ふことを辭

退せしことを許さゞるべからず。彼能く己の知らざる事を知り、事實を告白することを恥ぢざりき。彼は彼の贊言者の類には非ざりき。我此の輩の爲に如何ばかり苦められしか、彼等は我が知らんと欲する一切を我に教ふべしと約して、何等益する所なかりき。ファウストは設令爾に對してならずとも、己に對しては正直なりき。彼は全く其の無識なるに無識ならざりき。彼は其の速斷に由つて進退維谷まるが如き位置に卷きこまるゝが如きことを爲ざりき。而して之が爲に、我愈彼を愛好しき。蓋は謙遜なる公平は我が解かんと熱望せる問題よりも數等美なる故なり。一切の難問と隱微なる事件の中に我が彼の性質をして看破せしは是なりき。

是故に我がマニ教系に投入したりし熱心は、彈ね返されたり。我吾が疑問の爲に斯道の巨魁に就て此く判斷するに及んで、凡て他の博士輩に就て絶望したり。是故に我己が愛好する所の事業即ちカルセーシ

に於て修辭學の教授として既に一學級に教へたりし文學の研窮に、フ
ァウストと從事し初めたり。我彼と與に彼の自ら讀んと欲する物、又
我が彼の品性に匹當すと判せし物を讀みたり。然れども〻に於
て進歩せんと欲する吾が一切の欲望は、我がファウストを知るや否や
死滅し了りぬ、尙且我は全然〻に教者より分かれず、何等之に優る物を
見出さゞる煩悶よりして、我が前に尤めたりし如き結論を以て、猶一時
滿足せんと心を定め、以て他の好ましき宗旨の吾が眼を啓くを待つこ
とゝせり。

是に於て多の人に必死の係蹄なりし彼のファウストは、思はず知らず
從來我を捉へたりし其の係蹄より我を解き放ち初めたり。蓋は吾が
神、爾の不思議なる攝理の手を以て、吾が靈魂を賣すことを禁じたまひ
し故なり、且涙と共に濺ぎ出せし吾が母の心血、日夜我が爲に獻げられ
たり、爾は不思議なる秘密の方便を以て、我を待遇したまへり。嗚呼是

れ爾の爲したまふ所なり。蓋は人の足歩は主なる爾に由りて定めら
れ、爾自ら其の道を擇みたまへばなり。吾人の救拯の意義は何ぞや、爾
の手、其の造りし者を再造することの外なし。

第八章

彼其の母の志願に反して羅馬に發足す。

當時爾我が羅馬に往き、カルセージに於て教へつゝありし所を茲地に
教ふべき勸告を受くるやう我を處置したまへりき。我又我が如何に
勸告せられしかを爾に告白することを遺るべからず。蓋は此の如き
事物に於てすら、吾人は爾の隱微なる事業と、其の普遍なる慈悲とを認
識し、稱道せざるべからざればなり。我が羅馬に引着せられしは、一等
豐かなる給料と、一等高き尊敬を友人等が我に約せしが爲に非ず、(此の

思慮は勿論吾が決心を動かせしとはいへ、然れども首要なる、殆ど絶對の吾が動機は、茲地の學生の稍靜穩にして、一等嚴格なる訓錬に由りて抑制せらるゝと稱せられし事なりき。是故に彼等は他の敎師の敎室に騷然亂入するが如きことなく、而して講師の許可を得ずしては、決して出入を許されざりしは勿論の事なりき。

之に反してカルセージに於ては、學生の中に醜むべき放縱、混亂ありき。彼等は恥かし氣も無く敎室に荒れこみて、狂的狀態を以て敎師が其の弟子の向上の爲に創立したりし訓錬を破壞したりき。彼等は習慣之を許せるに非ずんば、法律に據りて眞正の暴行として所罰さるべき種々の事件を、極端の鐵面皮を以て之を行へり。之を許す所の習慣は法律よりも禍なり。蓋は爾の永遠の律法の曾て許さゞる所を、彼等に許して行はすればなり。彼等謂ふらく、吾人は無罪にして之を行ふと、特に知らず彼等の由りて以て行ふ所の旨目、即ち其の刑罰にして、其の他

人に科するよりも多額の禍害を、無限に己が身に受くることを。是故に學生として採用するを我が峻拒したりし惡習を、敎師として他人の爲に苦みつゝ之が爲に我は、此等の情實を知りし人の確證せし如く、此等の行爲の忍ぶべからざる土地を去ることを快諾せり。然れども是れ實は生命の地に於ける吾が「希望」、又「財產」なる爾が、吾が靈魂の救拯の爲に、地に於ける吾が住所を變へん爲に、活ける死物を愛する人々の處理に由りて、――一方に於ては彼等の狂暴なる蠻行に由り、他方に於ては彼等の無益なる契約に由りて、我をカルセージより追出して、以て羅馬に誘はん爲にして、又我が漂泊を規正する爲、陰に我と彼等との頑梗を併用したまひしなり。蓋は此等の震慄(おそ)るべき狂暴を以て、吾が間隙を襲擊せし輩は盲目にして、我を羅馬に招きし輩は徒(たゞ)地の事(世俗的事物)をのみ思ひ、同時に又我自ら一方に於ける實際の禍難を忌み、他方に於ける虛妄の幸福を切望せし故なり。

然れども我何が故に此地を去つて彼地に行きし乎。嗚呼吾が神、是は唯爾知しめす、爾之を我にも又吾が母にも示したまはざりき。母は吾が發程を深く歎きて、我を海岸まで追ひ來れり。母は我を固く其胸に懷き、己ど與に我を引返すべく、然らざれば彼我と與に往くべく願へり。然れども我は母を欺き、舟の帆を揚ぐるまで離れ難き朋友あることを、佯り言へり、若く我吾が母を欺けり、此の如き母を噫。而て我は遁れたり、爾又此事を憫んで宥し、然く愚なりし我を海の水より、爾の恩寵の水に藏めたまへり。是れ我之に由りて濯はれし時、爾吾が母の涙の泉を乾さんが爲めなりき。此の涙を、彼女は毎日爾に祈るとき我が爲に其の面より水の如く地に濺ぎぬ、尙且母は我を含いて家に歸るとを拒みしかば、我僅に舟に近き、惠まれたるシプリアンの紀念堂にて夜を明すべく母を勸めつ、然も我は夜に乘じて出發し、母は殘りて且祈り且泣きぬ。嗚呼吾が神母が涙を盡して爾に哀願せし所は、吾が出帆を爾の妨げん事に非ずして何ぞや。然れど爾は其の隱れたる智慮に由りて、母の情望の實質を許容したまひしかども、其の祈る所の事實を拒みたまひき。是は爾彼女の斷えず願ふ所を、我に爲さんが爲なりき。

而て風吹きて帆を孕ませ、海岸、吾が眼界より退謝せり。朝に及んで母は悲歎の爲に亂れて、怨言と嘆息とを以て爾の耳を掩ひぬ。爾之を省みたまはざりき。蓋は爾吾が欲望に乘じて、吾が欲望を葬るべき地に我を導かんとしたまへばなりき。然れば彼女の肉體上の切望は、豫定の悲哀の鞭笞を以て正されたり。蓋は母は母たる者の習の如く、我を己に繫がんとするの欲望、普通の母に優りし故なり。彼女は爾の吾が出奔より如何なる歡喜を彼女の爲に準備しつゝあるを知らざりしなり。實に彼女は之を知らざりき。是故に哭き且號び、其の心の沉痛の爲にイブの羞辱を顯はし、其の呻いて以て生みし者を、呻いて以て索めしなり。尙且其の吾が欺騙と殘酷とを詛ふこと其の終を告げたりし

時に、翻つて又吾が爲に祈り、祈り畢りて其の家に歸りぬ、我は羅馬へ吾が道を駛せぬ。

第九章

彼熱病の爲に死に瀕す。

嗚呼我茲地に肉の疾患の朴の下に仆れて、腸を斷つ諸の非行を己の背に負ひ、將に地獄に墮ちんとしき。吾が非行とは何ぞ乎、他なし、吾人人類がアダムに由りて死を招きし原罪の鎖鎖に加へて、我自ら爾と己と他人に背いて犯したる所の罪なり。蓋は爾耶蘇基督に由りて何等宥す所なく、耶蘇基督自身亦我が犯罪の結果として、爾に逆ひて懷ける所の怨恨を其の肉體の死に由りて銷磨すること無かりき。何が故乎、他無し、我が彼に歸したる所の其の幻影的肉體(耶蘇基督の肉體に關するマニ教の信仰)を以て彼如何でか能く之を銷滅するを得ん乎。是故に彼の肉體の死が如幻なるが如く、吾が靈魂の死は眞實なりき。彼の肉體の死が眞實なるが如く、(當時我之を信ぜざりき)吾が靈魂の生は如幻なりき。而て吾が熱病は愈危險になり、我唯喘ぎて死んばかりなりき。若我其時死したりせば、我何處に往くべかりし乎、唯吾が行爲が爾の誡命の義罰に相當したる所の火と痛苦とに入るありしのみ。吾が母之を知らざりき、尙且彼女は遙に吾が爲に祈りたりき。在さゞる所なき爾は母の在し所にて母の祈を聞き、我が在りし所にて我が上を憐みたまひき。是故に我俄然吾が肉體の健康を回復し來れり、唯其の心は依然狂妄不敬なりき、蓋は我其の重大なる危險の際に、嘗て爾の沒式を請はざりし故なり。回顧すれば我小兒なりし時、吾が母の敬虔に感じて自ら之を請ひ出でし日は、我今よりも善人なりき、我が既に追懷、告白したりし如し。

然れども吾が醜辱は我と與に生長したり。我爾の治術を哂ひて痴人の如くなりき。我斯く惡逆なりしといへ、爾我が第二の死に死するを許したまはざりき。若吾が母の心にして此の打擊を以て打たれしならば、其の痍永劫癒る能はじ。蓋は母の我に對する溫柔なる愛と、又其の肉に於て我を忍びし時より、今靈に於て我を愛ふる爲めに味ふ所の沈痛の更に如何に大なるかを說く能はざればなり。是故に若斯の如き吾が死を以て、一旦其の愛腸を貫かんには、我其の決して治さるべきを見ざるなり。且其の然く熱心に然く不斷なりし祈禱、何處に在りて存せし乎、別所に非ず、唯爾の庫の中なりしのみ。然れども慈悲の神なる爾、能く其の貞潔、淸淨なる寡婦の謙れる魂と悔改めたる心を藐視したまふべき乎。然く日々布施を事とし、然く聖徒に敬ひ仕へ、爾の祭壇に供物を供へて一日も怠ること無き者を藐視したまふべき乎、彼女は一日二回旦と夕に必ず爾の敎會に詣りき、空しき戲作を聞く爲ならず、

年老いたる妻女等の曉舌を樂む爲ならず、爾の敎導を親しく仰がん爲、己の祈禱を聽かれんが爲なりき。

爾能く彼女が爾に請ふ所の涙、金、銀、其他朽つべき無常の物の爲ならず、其の子の靈魂の救拯の爲に流す涙を藐視したまふ乎、爾又能く其の恩寵を以て今日あらしめたまへる彼女を、俄に見棄てたまふべき乎。否爾は恒に在し、恒に聞き、恒に其の預定したまふ道に隨ひて、一切を生起せしめたまひき。爾が此等の異象、預言的言辭(我之を或は記し或は記さず)に由りて、彼女を欺きたまはんは有るまじき事なり。彼女は實に此等の事物を、其の忠信なる心に納めて、恰も爾の手筆なるかの如く、不斷の祈禱に之を以て爾に逼まれり。蓋は爾の悲慈は永久に忍び、且一切其の負債を免したまひし者の爲、爾自ら謙りて、己の約束の爲に己を負債者となしたまへばなり。

第十章

彼の福音を信ずるに至らざりし以前の過失。

其時爾吾が疾患を治したまへり、一時其の肉體に就て爾の婢の子を助くる爲に然なしたまへり。是れ彼の生きて、更に佳良にして更に耐久の健康を爾より受けん爲なり。然も猶當時に在てすら、我自ら此等騙かれたる「聖徒」又騙く所の「聖徒」即ち獨り彼等の謂はふる「聽聞者」(此の中に吾が親友あり、我は實に彼の家に病臥し、回復したるなり)のみならず、又彼等の謂はふる「選ばれたる者」と交はりぬ。蓋は我猶、罪を犯す者は吾人に非ず、或る反對の天性が吾人に在つて罪を犯すと云ふ事を主張したればなり。且吾が倨傲に由りて、我は決して離せらるべき者に非ずと云ひ、又我惡を行ひし時に、我之を行ひしことを告白するを要せずと云ふ思想を以て誇となせりき。曰く我爾に背いて罪を犯したりし

故に、爾吾が靈魂を救ひたまふなりと。然れども我吾が靈魂に罔りて辯疏し、吾が罪を以て我に歸せず、我と與に在る所の我以外の或者に歸せり。然れど其實我は一なり、我に逆ひて我を分つは唯己の不義之を爲せしのみ。而して吾が犯罪の最も重大なる部分は、我自ら罪人に非ずと謂ふ念慮なりき。嗚呼全能の神、吾が咒ふべき惡慝は己爾に服して以て己の救拯を得んと欲するよりも、己爾を服せしめて以て己の滅亡を招くを擇みしに在りき。尙且當時爾は頑梗なる言語に我が心を傾けざるやう、邪曲を行ふ者と共に己が罪惡の爲に無益の推諉を爲さゝるやう、吾が口の前に警護を置き、吾が唇の前に克己の戸を立てたまはざりき。是故に我當時既に己が虛妄の敎理に向ひて眞正の進步を爲すべき望竭きたりといへども、猶彼等の謂はふる「選まれたる者」と結托して、若何等之に優れる宗旨を發見する能はずんば、此の一たび自ら滿足せんと決したりし理窟を主張せばやと、妄意に無心に之が緒まで

も啓きぬ。蓋は世間最智の哲學者なるアカデミー派が一切の事皆疑ふべし、確實なる物は人智の企て獲べき所に非ずと主張せりと云ふこと、不圖我が心中に浮びたりし故なり。我は人の概して思ふ如く思ふらく、是れ蓋し彼等の表面の意味なり、唯未だ其の眞意の在る所を捉へ得ざりしのみと。

我吾が寓主が、マニ敎の經典中に、圓滿に織り造られたる空談に安心せりと感ぜる其の無言の信賴を、公には沮害するに忍びざりき。尙且我は此の異端に屬せざる他の人々とよりも、此等の僚輩と寧ろ親しく生活したり。我復既往の如き銳利を以て、吾が道を辨護せざりしかども、尙且此等の僚輩(多く羅馬に理伏したりき)との交情は、吾が此以外の或る宗旨を索ぬることを嫌忌したり、是は天地の主にして、一切見るべき物と見るべからざる物との創造者なる爾の敎會の中に眞理を發見するに失望せし故に殊に然りき。蓋は彼等我を敎會より絕たしめたれ

ばなり。蓋神、人身の型を受け、吾人と齊しく體格の物質的輪廓に限定せられ得ること(神の子基督を神自身の化身と謂へり)を信ずるが如きは、我に於て純然恥辱たるの外無く見えにき。我吾が神に就て思惟せんと欲するに當り、何等か物質的實體ならざる者を思惟する能はざりき、(蓋は我何等是以外なる一物の存在せることを全然信ぜざりし故なり)。我が過失をして已を得ざらしめし、首要なる否殆ど惟一なる原因即ち是なりき。

之が爲に我亦惡の物質的實在ありしことを主張せり、謂へらく、惡亦自ら其の醜惡なる有害の容積、——其の粗糙なるにもあれ(此の場合には彼等(マニ敎徒)之を塵土と呼ぶ)若くは優美巧妙にして、空氣の實體の如く、彼等が之を塵土の中に貫通する所の惡意的智慧と感知する物にもあれ、——を有すと。敬畏の念は畢竟我をして神の善なること、其の惡を造る能はざることを信ぜしめしが故に我は二個反對の物質的實體

あり、兩者共に無限にして尙且惡は小にして善は大なるやう成立せることを主張せり。此の有毒なる發端より、吾が一切の他の冒瀆吾が上に起り來れり。吾が心正統的信仰に還らんとする每に、我忽ち反撥せられぬ。正統的信仰吾が思ふ所に合はざりし故なり。我其の慈悲を唇を以て感謝する所の爾を、全然人身の形骸に限られしものと考ふるよりも、一切の方面に無限にして而して惟一なり。(蓋は我惡の反對ある所には爾を有限と認めざるべからざればなり)と思ふことを、寧ろ敬虔と信じたればなり。

我爾が何等の惡をも造らざりしを信ずるを、――蓋は我惡は單に實體なるのみならず、又物質的實體なることを主張し、且心に就ては、優美なる實體の空間を貫通して散布せる物としての外は、何等の觀念を形?ること能はざりし故に、特に然く主張せし故なり、――我が惡とし主張せるが如き實體の、爾より來りしことを信ずるに勝れりと思ひき。爾の獨子なる吾人の救拯主に就てすら我想像すらく、彼爾の容積ある發光體よりして吾人の救拯の爲に發射せられつと。而して其の發射せられたる方法は、我が虛妄を以て想像し得たる所の外、彼に關する何等の信念を保つ能はざりし如き方法を以てせりと。我又思へらく若彼の性質(物質)斯の如くば、其の聖母マリヤから生るゝに當りて、肉と混淆する無きを得ずと。而も我は彼をして我が自ら想像したる如き者ならしめば、肉と混淆して、如何んぞ汚染を受くること無きを得んやと思ひき。是故に我は彼が肉體を以て生れたりと云ふことを信ずるを恐れたり。是は彼肉體を以て汚されしと云ふことを信ずるの已むを得ざるに至らんことを恐れし故なり。若し天上の靈物(即ち基督)にして、吾が此の告白を讀まば、必ず我を憫笑すべし、然も我は此の如き者なりしなり。

第十一章

彼と正統主義との關係。

我又思へらく彼の正統主義は爾の聖書に於けるマニ教の反對に答ふる能はずと、尙且每々我此の反對の點を實際聖書に精通せる或人と一一之を辯論し、之に就て他の思ふ所を見たしと感じき。蓋は是より先吾がマニ教に對して公然爭論するに慣れたるヘルピデアスなる者の議論、我がカルセージに在りし間我に印象を與へし故なり。蓋は彼聖書に基きて容易に論破すべからざる議論を提出し、之に對する吾黨の答辯の甚だ薄弱なるを感じたりし故なり。

彼等は公然其の答辨を提出するに應せりき。其の相會して密に語るに當り、我に告ぐるに新約聖書は或人々の爲に妄化されたり、其人々は猶太教の律法を基督教の信仰に接木せんと欲する輩なりきと云ふを

以てせりき。然れども彼等決して自ら純粹の正文を提出すること無かりき。然れど我は專ら此等の「容積」に由りて惟物主義に束縛せられ、緊着せられ、粉碎せられ、此の重負の下に呻吟して、爾の眞理の清新なる空氣を呼吸する能はざりき。

第十二章

羅馬の學生如何に其教師を欺きし乎。

我吾が羅馬に來りし目的の爲に、專心己を適用すべく始めたり。即ち修辭術の教訓なりき。我先吾が家に我が始めて知りあひし學生の一小團體を召聚したり。嗚呼我が亞弗利加に於て免がれし其の煩悶を、更に羅馬に於て發見せしは此時なりき。青年放蕩家が、此地に「破壞」を行はざりしは事實なりき。然れども吾が友人等「如上の學生」の語る所

に據れば、「彼等の一隊其の月謝を拂ふことを免がるゝ企謀の爲に、俄然として襲來し、忽ち又他の敎師に向ひ、「金錢を愛むが爲に其の信仰を破壞し、正義を藐視せりと。吾が心彼等を憎みぬ、縱令公平なる憎惡を以てせずとも、蓋は我彼等が同一無法の所行を以て他を虐するが爲よりも、寧ろ我自ら彼等の爲に苦しむべかりし爲に彼等を憎みし故なり。然れども此の如き事物を行ふ輩は、確實に是れ卑劣の人、神に背いて淫亂を行ひ、其の代の無常なる迷妄を好み、若人之に觸れば其の手を汚す所の穢き所有物を愛し、過去る所の此の世に執着し、常に在して爾に歸順する所の汚れたる靈を召びて、其の罪を宥す所の爾を輕ずるものなり。我は今も猶此かる陋き、邪なる人民を憎む。唯之を改良せんが爲に之を愛し、之に金錢よりも學問を貴ぶべきこと、更に學問其物よりも爾を貴ぶべきことを敎ふるのみ。爾は眞理にて在ます神、無盡の善、不染の平和に盈ちたる神なり。然も當時の我に在つては爾の爲に彼等を改良するの欲望よりも、己自身の爲に彼等の惡行を憎む方多りき。

第十三章

彼修辭學敎授としてミランに遣られ、此地にてアムブロースの攝くる所となりしこと。

是故にミラン人が人を羅馬に遣りて、羅馬の市長に要むるにミランの爲に修辭學の敎師を供給せんことを以てし、之に公費を以て旅費を供すべきことを提言せしとき、我は此等マニ敎の熱狂者を經由して、其の需用に應せんことを市長シムマカスに申告し、相當なる試撿を受けて、自ら其位置を得んことを願へり。當時我も彼等も其の結果を預言するを得ざりしかど、我が彼等の中を去るは、彼等と分るゝ一歩なりき。是に於て我ミランに往き、此地に爾の敬虔なる監督アムブロースに遭

べり。此人は當時に於ける最善人の一人として、其名普く世界に知られ、其の能辯は當時專ら爾の小麥の滋養と、爾の膏油の歡喜と、爾の葡萄酒との眞面目なる甘美を以て、爾の人民を養ひつゝありき。我爾に由りて知らず識らず彼の前に導かれたり。是れ我彼に由りて導かれ、吾が眼爾に啓かれん爲なりき。此の神の人、慈父の如く我を受け、眞の監督の如く旅人を歡迎しぬ。

我竟に彼を愛するに至れり、初は眞理の敎師としてに非ざりき、蓋は之を敎會に於て發見するに失望せし故なり、然れば唯我に親切なりし同胞として彼を愛しき。我は其の說敎に注意の耳を峙てたり。而も正直なる心の態度を以てせず、其の能辯が其の名譽に匹敵せるや否、其の懸河が世人の傳稱せる如く廣濶なるや、若くは狹少なるに非ずやを批評せり。而て我熱心に彼の演說に留心し、其の題目に對しては冷淡なる又輕蔑せる傍觀者に止まりし間に、偏に其の語法の魔力を喜びぬ。

其の語法はフラウストの其に比すれば、彼は學識優れりとはいへ、其の輕快流暢は彼如かざりき。然れども其の題目の方面より視れば、固より同日の論に非ざりしなり。蓋は一がマニ敎の迷妄の中に彷徨せし間に、他は全幅の熱誠を以て生命の道を敎へたればなり。然れども救拯は當時の我が如き罪人より遠かりき。而も我自ら知らざりしとはいへ、漸徐に其の方向に率かれつゝありき。

第十四章

彼漸徐にアムブロースの敎訓に由りて心を照らさる。

我彼が宣ぶる所を解せんと務めず、獨彼が如何に宣ぶるかを聞かんとのみ務めしかど、蓋は人の由つて以て爾に近づく道ありしことに就て既に失望すべく始めし以後、唯此の無益なる趣味のみ、我に殘りし故な

り。尙且我は己の忽諸に附せし事實が、己の愛好せし言辭に由りて、吾が心底を樸るべく始めたり。蓋は我此等を分離すること能はざりし故なり。而て我彼の能辯の說敎を歡迎すべく、吾が心胸を開きしより、我單に步一步づゝとはいへ、彼の說敎の眞理を感ずべく始めぬ。中に就て我先彼の宣ぶる所は辨證せられ得ることを感じ初めぬ。吾がマニ敎の反對說に向つて、答ふる能はずと從來想像したりし彼の正統的信仰を、自重を以て主張する能はずと云ふことを既や復たび思惟せざりき。殊に比喩法に由りて說明せられし舊約聖書に於て、許多の難問悉く解釋せられたるを見し後愈然りき。蓋は我儀文を以て此等の聖書を讀みし間、我靈に於て殺されたりしなり。而て聖書中の許多の章句の說明せられたるに當り、我は律法と預言者を憎み且哂ひし人々に、何等の抵抗を爲すを得ずと信じたりし己の絕望を難じ初めぬ。尙且我は正統主義が偶有識なる鬪士が、許多の輕侮

すべからざる同盟者と與に、マニ敎の反對說に對戰し得る者を有するが爲に、我亦之を挑るべき者なりとは思はず、又双方共に辨證すべく見ゆるも、之を以て吾が持論を棄てゝ他を取るべき十分なる理由とは考へざりき。我斷ずらく、正統主義は唯敗れざるのみ、未だ勝てるに非ざるなりと。此點に於て我はマニ敎の虛妄を斥け得べき決證ありや否を考究し始めたり。若我靈的實體に就て考へ得たらんには、一切の彼等の劃策は忽ち破れて、忽ち彼等を振り棄て得たらん。唯我猶未だ之を有るべからずと思ひしのみ。

然れども我が愈考察を積み、愈比較を行ふほど、殆ど有らふる哲學が、世界の組織と、肉の官能の感覺し得る一切萬物とに關して、マニ敎よりも遙に眞理に近き論說を主張したるを愈確めたり。是故に希臘哲學、又は普通に希臘哲學と思惟せられたる者の中に於て、我猶一切の事物を危疑し、心動搖せりと云へども、尙且我は斷然マニ敎を棄つべく吾が心

を一決し、蓋は一派以上の哲學に比して劣れりと、斷きし宗旨に我自ら屬せるは惡しと、懷疑の淵にて考へし故なり。尙且我は此等哲學に向つて吾が靈魂の治療を委ぬることを絶對に拒絶したり。蓋は此等哲學は嘗て世を救ふキリストの名を知らざりし故なり。我是故に或る清光の閃めきて吾が道を啓示するまで、正統敎會の沒式志願者たるべく心を決しぬ。嗚呼是れ吾が兩親が夙に我に勸めたりし物なりけるなり。

第六篇

此篇に於て彼はモニカのミランに到來せしと、其の三十の齡に及んでマニ敎の頑梗に攻擊したりし正統的眞理を、アムブロースの說敎に由りて氷解せしことを語り、次で其の友人アリピアスの性格及び己とチブリチアスとの知遇を記し、又斬新向上の生活の思想が投射したる精神的痛苦を自白し、死と審判の恐怖を日々に己を改悔に近づかしむることを告ぐ。

第一章

マニ教者にもあらず、正統信者にもあらざるアウガスチン。

嗚呼吾が少年時代以後、吾が望なりし所の爾、爾は今何處に在す乎、爾は我を離れて何處に往きたまひし乎、爾我を造り、四足の獸、空の鳥より優れる者と爲さゞりし乎。爾我を此等に優りて智く造れり、尙且我は闇き滑なる道を迷ひき。我爾を己の外に尋ぬ、吾が心中の神を看出す能はざりき。我深淵に陷りて眞理を疑ひ、之を發見すべき望を失へり。是時に當りて其の敬信に由りて力を得たる吾が母、爾に於ける信仰の

アウガスチン懺悔錄

力に由りて、有らゆる危險を恐れず、遠く海と陸とを越えて我を尋ね來れり。蓋は母は暴風雨の絶頂に於て、海に慣れざる航海者の錯愕を和むる職に在る所の舟子をすら皷吹し、其の異象の中に爾の彼女に之を約したまひし故に、彼等に約するに其の必ず安然に上陸すべきことを以てせし故なり。

母は我が眞理の探見に絶望して、甚だしき危險の中に在るを發見せり。然れども我未だ全く正統信者たらざりしかども、既に已にマニ教者ならざりしことを母に語りしとき、母は此の意外なる福音に於て喜悅に溢れざりき、其の不幸の半は之に由りて救はれしかども。蓋彼女の不幸と謂はゞ他なし、彼女をして我が爲に哭かしめ、我を既に死せし者、然も猶蘇生せしむべき者として、之を柩に納めて運ばしめたる物なり、是れ爾此の寡婦の子に謂ひて、「少年よ我汝に命ず起よ」と曰はんが爲、而して少年爲に起き回りて語り初め、爾之を其母に返し與へたまはんが爲

なり(路七〇十四、十五)。我吾が母の日々涙を以て求めし所、既に大半獲られたるを見、又我が未だ眞理を握らずとはいへ、猶虛妄より救はれたりしを聞きながら、其の心喜悅に由りて浮き立たざりしことを言へり、否反りて母は一切を約したまひし爾が、猶未だ盈たずして殘る所をも、必ず許して盈したまふべきを信任せしかば、彼女は信任堅固の容貌を以て平然として曰ひけるは、「我身此の世を去るまでには、御身が基督信者となるべきを、基督に由りて信ずるのみ」と。

母は斯く冷に我に答へぬ、然れども其身に於ては慈悲の源なる爾に向ひて、前より愈熱き涙と祈禱とを濺ぎ出せり。是れ爾が愈迅く我に來りて、吾が闇黑を照らさん爲なり。彼女は前より愈熱心に敎會に趨り、アムブロスの唇に心を注め、之を湧出で永生に至る生命の泉と爲せり。蓋母は此の偉人の故に由りて、我が一時動搖の狀態に致されしかば、彼を神の使として敬ひ愛しき。彼女は之が爲に確く信じて謂ひけ

らく、我吾が熱の絶頂即ち醫師が危篤と喚ぶ境遇に達せし故に、今より數倍重大なる危險に上ること無しとせざらんも、我は竟に吾が健康を回復するに至るべしと〔肉體の疾病を靈性の懷疑に譬へしなり〕。

第二章

殉教者の墳墓に於ける紀念祭と聚會。

而て母は聖徒の紀念の前に來りて、亞弗利加の習慣に從ひて持ち來りし、餅、麪、及び葡萄酒を携へ入ることを門者に禁ぜられしに當り、此事の該監督の命令に背けることを聞きしや否、其の之に服從するの恭謹なる、我をして母が如何にして其の命令を爭はずして然しも甘して其の習慣を棄てたるやに喫驚せしめしばかりなりき。蓋は母の精神は頑固なる執着の爲に毒せらるゝなく、又酒の嗜好の、彼女を激して眞理を

憎ましむるなく、多數の善男善女の場合に於けるが如く、節制の讃美歌に於てすらも其の飲慾を起すこと、恰も一杯の水を見ても猶之を起すが如きに非ざりしなり。母は平常の食物を盈し、籃を、自ら味ひて之を附すべく携帶すとはいへ、其の位置の要求を充す爲に、其の卓子に陳ぶる所は、一二の杯の酒液に過ぎず。彼女は其の位置の要求に應ずる爲、己の節制せる嗜好に適するやう、水を和したる酒の一小杯の外、其卓子に供ふる所なかりき。若し其の死者の紀念祭に召ばるゝ時には、母は何處に往くにも如上の一小杯を携帶し、其友をして僅に之を啜らしむるのみ。是故に其の內容は殆と微溫の水に異る所無き物となれりき。蓋は彼女は快樂を求めず、奉仕を求めたればなり。

然れども、此の有名なる教師、敬虔なる牧師が、此等の事物を爲すことを禁じ、莊敬を以て之を爲せし人々の之を爲すをも禁じ、而して其理由は、度を過すの機會の、不節制者に與へられざらん爲なること、又更に此等の

紀念祭の餘りに異邦人の迷信的先祖祭に似たるが爲なることを學びしときに、母は喜んで之に服ひ殉教者の紀念祭に地上の菓物を滿載したる盤の代りに、一倍聖潔なる供物を充實したる胸懷を獻ぐることを學びぬ。是故に彼女は貧者の爲め、又主の肉體の晩餐禮の、殉教者の紀念碑の前に祝はれん爲、(是れ殉教者は主の肉體の苦難を受けしに倣ひて屠られ、榮光を得たるに因る)、其の力の及ぶ限の物を獻げしなり。然れども神よ爾の前に於ける吾が心の思惟は是なりき、曰く吾が母若其の愛することアムブロースに如かざる者に由りて命せられたらんには、恐らくは然く容易に此の習慣を廢止するを承諾せざりしならんと。母は其の子なる吾が救拯の爲に彼を愛すること深かりき。彼亦母の敬虔なる談話の爲に之を愛し、靈に於て、凡の善工に於て、彼女の心を熱からしめ、斷へず教會に導きたり。是の故に彼は我を見る毎に我に對ひて母を美め、我が斯の如き賢母を有てるを祝せり。彼は母が我

に於て如何なる子を有てるかを猶未だ知らざりしなり。蓋は我今一切の事物に疑團を挿み、生命の道到底發見すべからずと斷せし故なり。

第三章

アムブロースの勤勉と研究。

且我祈禱に於て爾の保助を喚び求めず、吾が精神は獨穿鑿に專一にして、諍論に熱心なりき。我はアムブロースを世界の福者の一に數へぬ、蓋は彼時代の有力者に由りて此の如き名譽を受けたればなりき。我思ひき、獨其の獨身が彼に重負たらざる可らずと、然れど彼は如何なる希望を涵養せしか、其の高位に對する誘惑に向つて、如何なる苦戰を戰はざるべからざるか、如何なる慰安を艱難の中に發見するか、其の內なる靈の舌を以て、天より降れる眞の麪に、如何なる甘美の歡樂を味ふか、

大凡此等は我が揣摩し得る所にあらざりき、蓋は我之に就て何等の經驗を有たざりし故なり。同時に彼は我が懷疑の熱病をも、又吾が冒險の深坑をも知らざりき、蓋は我我が欲する事件を、我が欲する時に彼に問ふことを得ざりし故なり、蓋は彼が仕ふる所の、弱所を有する人民の喧噪なる集群、我と彼の耳又唇の間に侵し來りし故なり。其の斯の如く圍繞せられざりし時の數分時間に於て、彼は食事を以て其の身體を蘇息するに非れば、讀書を以て其の精神を復興しつゝありしなり。彼の讀む間、目は忙しく紙面を徘徊し、心は其の意味を穿鑿したり、然も其聲と舌とは安息してありき。

吾人の其前に出るとき、(蓋は其の戸萬人の爲に開放せられ、何人も通告するを要せざれば)、吾人は彼の靜に讀めるを見き。是に於て暫らく無言に座したる後、(蓋は然く忙しかる人を誰か敢て煩はすべく試みん乎)吾人は再び出て去りぬ。謂ひけらく、此の一片の時間、是れ彼が其の精

神の蘇息の爲め僅に保存し得たるもの、彼之を定めて己の聖日とし、他人の用事の煩累を避け、妨害せられざるやう願ひし所なるべし。而して恐らくは彼は熱心なる聽問者が、己を誘ひて己の引用書の難句を說明せしめ、難題の議論に涉らしめんことを恐れしならん。是の如きは其の間隙を費し、其の讀まんと欲するだけの書籍を讀むを妨ぐべき事業なり。又其の默讀の理由は多分害され易き其の聲を保存する必要ありし故に在らん。斯の如き聖人を斯く導く所の道理は、恒に善なる無きを得ずと。

然れど短簡なる聽問の外には、彼の胸中の聖なる宣託に商議する何等の機會を、我が發見せざりしは是の故なりき吾が難問の洪水は、彼の指揮に由り、豐饒なる餘閑に於て、一個の聽者に吐露し得べかりしのみ、而も我は此の如き人を發見し得ざりき然れども我アムブロースが主の日ごとに、人民の前に正しく主の言を操るを聽き、漸徐に吾人欺騙者が

聖書に反對して組織せし狡猾なる詭辯の一切の網羅を解き得べきこ
とを審にし得るに至れり。

而て我は、人は爾の像に象り造られぬ(創一〇二七)といふ語を、爾の恩寵
に由りて、「正統教會なる母胎」より更生したる爾の靈の子衆は、爾が、人身
の形を取るに由りて限定せられたることを意味せる者として了解せ
るに非ざりしことを聞くに及んで、我は靈的實體の眞性の何等の觀念
を形るを得ず、比喩方に由りてすら然か爲し得ざりしとはいへ、尙且我
は大凡此數年間、正統信仰に對してならず、肉的思想の虛しき計略に對
して吠へたりしことを、且喜び且羞づるを禁ずる能はざりき。我は審
に研究者の口吻を以て言ふべかりし者を、詬罵者の其を以て言ひたり
し事に於て、實に輕率にして不敬なりき。蓋は爾は最も高くして又最
も遠く、最も遠くして又最も近き者、大なる部分なく小なる部分なく、然
れども、全體として在らざる所なく、然も又在る所なし、肉體の形を有せ

す、尙且人を己の像に造りたまへり、見よ首より足まで人は空間の中に
在り。

第四章

彼アムブロースの「訓教」に由りて「教會」の教理を會得し始めたり。

當時我如何なる狀態を以て爾の像の存せるか、之を知らざりし故に、我
が爲すべき所は、其の如何に信ずべき乎を敲いて之を問ふべくして、我
が信せられたりと想ふ所を輕侮して之を拒絕すべきに非ざりき。是
故に我が猶精確として主張し得し所は何ぞやといふ、咬むが如き懊惱
は更に他の恥辱の爲に刺激せられたり、其の恥辱とは精確を保證する
約束の爲に嘲笑、欺騙せられて、我が斯く久しき歲月の間、小兒の錯誤と
不平を以て、不精確なる事物を恰も精確なるかの如く多辯したる事是

なり。蓋は其の全然虛妄なりしことの、己が眼に明なりしは後年の事なりし故なり。當時惟其の不精確なりし事、及び我其を取つて精確とせし事の精確なりしのみ。同時に我旨然爾の正統敎會を攻めにき。然も是は我が然く嚴酷に難詰したりし事物を敎へず、唯我其の敎ふる所の眞理なりしを發見せざりしのみ。我是に於て大に惑ひ、悔改の路に就きたり、且吾が神に告白す、我爾の獨子の「體」即ち爾の「惟一の敎會」、吾が幼沖より基督耶蘇の聖名を吾が腦裡に印せし所の聖會が、決して兒戲的荒唐を信じ居ざりしと、萬物の創造者なる爾が空間に囚はれて、設卓越巨大なりとはいへ、尙且人間肢體の形狀に限劃せられたりと云へるが如き事項を信じ居ざりしことを識りて、歡喜に溢れざるを得ざりしなり。

我又律法と預言者の舊約聖書を、別眼を以て見得しが故に喜べり。是は我が爾の聖徒を其の嘗て信せざりし所を信せりとして難詰せし間、

恒に然く荒唐らしく見えし物なり。我幸にアムブロースが其の人民に對する說敎の中に、最も愼重に注意すべき規則として、「儀文は殺し靈は生す」(哥後三〇六)といへる語を主張し、秘密の覆面を除き、文義が痴事を敎ふべく見えたる章句の、靈的意義を啓き示して、未だ嘗て何等我を激すべき事物を語らざるを聞きたり。惟我未だ彼の語る所の眞理なりしや否を語る能はざりしのみ。蓋は我俄に吾が心を放下せず、跛者に縋りて落命するが如き懸涯を避けし故なり。蓋は我見えざる事物の精確を保證すること、七と三の和が十なる如くならんを要求したればなり。

我は勿論此事〔七と三の十なること〕すらも知るを得ずと考ふるまでに狂妄には非ざりき。然れども一切の他の事物に就き、此事に於けるが如き確證を得んと欲せしなりき、直接に吾が感覺に顯はされざりし物質的事物に就ても、物質的觀念の外形くる能はざりし靈的事物に就て

も。若我己が潔められたる眼光を、何等かの方法を以て、一切の部分に恒に存して墮つること無き爾の眞理に向けしならば、信仰に由りて治されたるべし。然れども恰も拙醫の爲に苦められし人が、良醫にすら其の身を委ぬるを恐るゝ如く、吾が靈魂の治療に於ても亦然りき、是は正に唯信仰に由りてのみ治され得べかりき。而も其の虛妄なりし者を信せんことを恐れて治さるゝことを否み、信仰の處方を調合し、之を世界の有らふる疾患に適用し、至高の權威を以て之に調印せし所の爾の手を拒絶したり。

第五章

聖書の權能と其の必要。

然れども此時より我は寧ろ正統教義を擇むべく始めぬ。人に命ずる

に、證明せられざりし事物(其は設萬人にならずといへ、或人々に證明せらるべし、或は全然何人にも證明せられざるやも又未だ知るべからず)を以てする此の教會の、マニ教徒よりも謙遜正直なるを感じてなり。彼のマニ教徒は輕信を嘲罵し、學術的智識を與ふべき輕率なる約束を爲し、忽ち最も虛妄なる無意義の中に信仰を委ねしむ、其の證明するを得ざるが故なり。嗚呼吾が神よ是に於て爾は漸徐に其の溫く慈悲深き掌を以て吾が心を慰撫し、我をして、縱令我が目擊せざるも、而も我が信仰したる無量の事物に就き、即ち人類の歷史に就き、我が嘗て至らざりし國土、市邑に就き、朋友に就き、醫師に就き、一切の人類に就きて——此等は若吾人が何事をか爲さんとせば、必ず信せざるべからざる事物なり、——想到せしめ、最後に我が生れ來りし兩親に就て、我惟人に聞きし所に由りてのみ之を知り得しとはいへ、吾が信仰の如何に絶對に確固なるかに想到せしむ。而て爾我に曉すに、殆ど萬の國民の中に爾の

至高の權威を以て確定したまひし聖書を信ずる者を難ずべきに非ざることを以てし、反りて之を信せずして、此等の書籍が惟一の最も信ずべき神の靈に由りて人類に與へられしことを、汝何如にして之を知るや」と問ふ輩を難ずべきを以てせり。蓋は此の聖書は最も信すべき物なればなり。蓋は相互矛盾せる許多の哲學者の著述の中、我が讀みしほどの有らふる詭辯强辭も、一刹那といへども爾の實在を疑はしむるを得ざる故なり。唯我が爾の如何に在すやと云ふこと、人類を統べ治むるは爾に在りと云ふことを知らざりしのみ。

我は是を信ずること時としては堅固に、時としては微弱なりしかども、尙且我は恒に之を信せり。即ち爾の實在したまふこと、爾の吾人を保證したまふことゝもなり、唯我爾の性質を如何に考ふべきか、爾に出入すべき道如何と云ふことを知らざりしのみ。而して吾人は單に、道理の光を以て眞理を發見せんには、餘りに荏弱なるが故に、之が爲には聖

書の權威を要する故に我は愈信じたり。我爾が、聖書に斯の如き卓越なる宇宙的なる權威を歸せしは、爾の聖意、爾の之に由りて人に信せられ、之に由りて尋ねらるゝに在りしに由ることを信じ初めぬ。蓋は此の時に及んで我聖書の矛盾に對する說明を發見し得し故なり。此の矛盾は每々我を駈つて其の奧義の深淵に沈ましめし物なりしが、今其の十中八九合理的に說明せられしを聞きたり。是に於て其の權威は我に於て愈畏こく、其の尊貴なる信仰の爲に愈價値あるを見る。蓋は人之を讀むに當りて、其の深甚なる思想の偉大を、一等深き裏面の意味に包藏し、表面に於ては其の明白平正なる說話を以て讀者に愬へ、心の光を存せざる人々に注意を課し、其の親切なる腕を以て一切の人を攝取し、狹隘なる虧隙よりして極めて少數の人を爾に導く。尙且此の少數さへも、其の權威の若く尊く崇められて、人民の大衆を其の聖き謙遜の心の中に引着けたるに反して作り得たらん者よりも、遙かに多數な

りしなり。我此等の事物を默考せしに爾我と同に在りたりき、我嘆息せしとき爾耳を傾けたまひき、我疑問の爲に搖かさるゝとき爾我を啓導したまひき、我世界の公道を旅せしとき、爾我を棄てたまはざりき。

第六章

野心の爲、快活なる乞食の模範。

吾が心情は立身、收入、結婚生活等の問題に充たされたりき。爾は之を嘲み笑ひたまひき。是等の情慾の爲に我苦き煩悶を受けたり。爾は一切爾の屬ならざる物の甘美を傷ぶりて、以て其の寵遇を證したりき。嗚呼主之を憶へて之を爾に告白する吾が心情を鑒みたまへ。蓋は爾は執着强き粘鳥膠より、吾が靈魂を解放して之を爾に屬けたまひし故なり。嗚呼我如何に禍なりし乎、爾は其の傷痍の疼痛を治したまへり。

是れ其の靈魂が一切を振り棄てゝ、萬物の上に在し萬物を維持したまふ爾に歸り、爾に歸りて痊されん爲なり。嗚呼我如何に禍なりし乎、爾は如何に我をして吾が强記の日に、吾が禍を感せしめし乎、當時我、皇帝の面前にて朗讀すべき頌德表を草しつゝありき、是は我諸の無實を其の中に宣べ立て之を無實と知る所の輩に由りて稱讃を博すべかりし物なりき。吾が心胸は今此の重負の下に喘ぎ、疚ましき思想の煩熱の爲に動悸したりき。其時我ミランの一市街を通行して、一の不憫なる乞食を發見せり。我謂ひけらく、彼は十分の食糧を得たり、故に嬉み笑へるなりと。我是に於て嘆息を發し、吾が同伴に吾人の不健全なる事業に伴ふ所の憂悶を語りて曰く、大凡吾人の勞力、恰も今我が執れるが如き類は、肉慾の鞭笞の下に、禍難の重負の爲に努力し、其の努力に由りて更に重負を重からしむこと如何ばかりぞ、而して其の得んと慾する目的は平和なる快樂の外あるなし。然るに彼の乞食は既に吾人に先

つて此の平和なる快樂を獲たり。我等に在つては恐くは終然之を得る時無からん、彼が施舍として投與せられし數錢を以て購ひ得たる所の物、即ち現世の幸福の喜樂、之に向つて我は猶長く倦ましき問道を迂りて追ひ求めつゝあるに非ずやと。

彼の喜樂の眞の喜樂に非ざるや明けし、尙且我が野心的企謀に由りて求めつゝある物の眞ならざるは之より更に甚だし。且彼は審に滿足し、我は憂悶せり、彼は平和に於て在り、我は惶愕に充たされたり。若人我に問ふて君は愉快なりや、將た痛心なりやと曰はゞ、我は「愉快」なりと答へん、彼又問ひて君は彼の乞食たらんことを願ふやと曰はゞ、我如何に憂悶と恐懼に倦めりとはいへ「我」たらんことを願ふやと答へん。然れども是れ唯我慢に出でゝ然るのみ、眞情然る能はざるなり。我は他より博學なるが爲に、自ら他より幸福と勘ふる能はず、我が學問は我に何等の快樂を與へざるなり。我徒我が學問を人に

誇るべく用ふるのみ、——人を敎ふるに非ず、徒人に誇るのみ。是故に爾亦其の訓鍊の杖を以て、吾が骨を碎きたりしなり。

「其の喜樂に根本の差別あり、乞食の喜樂は暴飲に在り、君は光榮の歡喜を求め居るなりと吾が靈魂に曰ふ者よ、吾が靈魂より遠かれ、其の光榮は爾に由らざる光榮なり。蓋は彼の喜樂の如幻なるが如く、吾が光榮も如幻なり。而も此は彼に比すれば一倍吾が頭腦を疲れしむ。其夜彼は眠りて其酩酊を醒さん、我は吾が酩酊のまゝ、久しく眠り且醒めたり、猶眠り且醒むべかりき、——何日まで斯くてあるべき乎。尙且喜樂の根源に差別あり、我能く之を知る、忠實なる希望の喜樂は彼の如き虛妄の類と世界を隔てたり、尙且其當時に在つて乞食は我よりも優りたりき、蓋は彼我に比して幸福者なりし故なり、是れ吾が生活が痛心の爲に引き裂かれたる間に、彼は喜樂に盈されしのみならず、更に我が徒に虛詐を以て驕慢を養ふ間に、彼は正當なる手段を以て其の酒を得しが

故なり、我は此の意味を以て多く吾が友人に語り、又屢已に在りし所を彼等の間に發見したり。是に於て我は其の極めて已に惡なるを見、而も之を悲むことに由りて、更に其の惡を重ねたり。然れば、縱令好運惠然として我が上に來るも、吾が心、之を捉ふるには餘りに疚しかりしなり、是故に吾が手を握りし前に、好運は既に已に飛び去り居しなり。

第七章

彼如何に其友アリピアスを演武場に於ける狂熱より轉せしめし乎。

此の如き、是れ朋友として生活を俱にせし所の吾人の不平なりき。然して我が常に親しく己の煩悶を洩すはアリピアスとヲブリヂアスの二人なりき、アリピアスは吾が同鄕の人にして、其の兩親は最も富有なる市民なりき。彼は我より年少く、我が始めて故鄕に於て、次でカルセージに於て講義を開きしとき、彼は我が性格と學識とを推尊して我を愛慕し、我又然く年の少き人には著く備りし彼の德性の秀異に感じて彼を愛じたり。然れどもカルセージの俗、觀玩を喜ぶの熱情旋風の如く强烈なるに、彼亦演武技の狂熱の中に生長せり。彼が禍にも此の旋渦に投せし間に、我は既に修辭學の敎授となり、公立學校の講座を占むるに至れり。然れども此時彼は彼の父と吾が父との不和の故に由りて、吾が敎室に屬し居ざりき。我は彼が演武技に沈溺して身を滅すべく墮落せんとするを發見し、深く之を慘みたり。蓋は彼自ら其の前途遼遠なる希望を既に失ひしに非ずとするも、將に失はんとせるを我は考へし故なり。然れども亦彼を諫告し、又彼を壓制すべき何等機會を有せざりき、是我が朋友たる信任をも敎師たる權威をも有せざりし故なり。我は彼が其の父と同じ感情を以て、我に對せりと想像せしが、非

ざりき。彼は其の事件に於て父の意見に介意せざりしかば、彼は再び我に會釋し、吾が教場に入り來り、吾が講義を聽き初めたり。然し是れ唯一時にして彼は再び出で去りぬ。然れども我實は彼を諫むることを忘れたりき、其の無益なる嬉戯に惑溺して、妄りに其の秀異なる性質を敗ぶることの危險を諫むることを。

然れども主よ其の造りたまへる萬物の樞機を操りたまふ爾は、他日爾の子の一人、爾の聖禮の祭司と數へらるべかりし彼を、決して遺れたまはざりき。其の改善の必ず爾に歸せられん爲に、爾は之を吾が無心の作用に由りて爲したまへり。蓋は一日我吾が教場に坐して、凡吾が學生の爲に圍繞せられし際、彼又來りて我に會釋し、其の坐に就き、衆と與に講義の事件に其の精神を傾注したり。偶然にも我が從事せし所の章句の說明が、例證として演武技を用ふべきを暗示し、我をして其の狂事の犧牲たる者を冷罵する事に由りて、愈明亮に愈巧妙に吾が意味を

行らしめたりき。嗚呼神爾は知りたまふ、我はアリピアスの病を治さんと考へしに非ざりしことを、然も彼は吾が言說を己の身上に取り、我が偏に彼が爲に之を語りしことを思ひ、而して他人なりせば、我に對して憤慨せしむべき所以の物、彼をして己に對して慨憤せしめ、爲に愈我を敬愛せしめたり。久しき昔爾は其の書に既に斯く錄して言ひたまひき、「智き者を責めよ彼汝を愛すべし」と。(箴九〇八)

然れども彼を責めし者は我に非ず、唯爾、有らゆる人を用ひて、彼其の自ら知ると否とに拘らず、之を爾の經營したまふ攝理——其の攝理は公正なり——の器として用ひたまふ者、吾が心腸と言語とをして此の有望なる智慧の大患を焼き、之を治すべき熱炭となしたまひしなり。爾の慈悲を識らざる輩をして、爾を美むることを否ましめよ、我は獨吾が靈魂の深底より爾に告白す、蓋は我が此の言に感じて、アリピアスは自ら好んで投入し其の劣情の爲に盲せし所の其の深坑より飛び出て、其

の剛強なる克己力を以て自ら鼓舞振作し、終に一切演武技の泥土を拂り飛ばして、再び其の場所に足を容れざるに到れり。且彼其の父の嫌忌に克ちて我が學級に加はるの許可を得たり、其の父も讓りて之を許すに至れり、アリピアスは今再び吾が弟子となり、又吾が謬信にも捲こまれ、其の自ら稱する所の謹嚴なる規律を聞いて之を眞實眞率なりと信じてマニ教を稱讃したり。然れども是れ實は不合理、詭計的の事物にして、猶未だ道德の深度を測るに慣はず、隨つて陰鬱なる矯飾的なる道德の爲に欺かれ易き、貴重なる靈魂を陷るゝ物たるに過ぎず。

第八章

アリピアス如何にして其の一たび忌み嫌ひし角鬪的觀玩の狂熱に再び奪はれしや。

然れども彼猶ほ其父の彼に魔術を加へたりし地上の召命を棄てざりき。是故に彼は法律を學ばんと、我に先ちて羅馬に往きたり。此地に彼は再び――不思議に非ずや、――角鬪の觀玩の爲に、不思議なる情慾に由りて奪はれたり。彼は固より之を憎みき、偶彼の朋友即ち同學生の一隊、其の朝饌より返り來る際、往來にて彼に遇ひ、戲弄的暴力を以て彼の抗拒し反對するにも拘らず、彼を此の殘忍、血を流す演藝の行進しつゝある半圓劇場に彼を拉し行けり。彼叫んで曰く、縱令吾が五體を曳き擦り行きて、其所に我を据ゆるとも、如何で吾が精神と兩眼とを此の如き觀玩に向けしむることを得んや乎と、其にも拘らず彼等は其の言の眞僞を知らんと欲する好奇心を起して、强いて彼を伴ひ往きたり。彼等は往いて、其の發見し得し最好の位置に坐を占めたり。此時正に半圓劇場の隅より隅まで恐ろしき激昂を以て怒號し居れりき。彼は牢く其の眼を閉ぢ、其の心を誡めて、此の如き罪惡に褻れしめざり

き。彼又其の耳を封するを得ば封じたりしならん、蓋は戰鬪の一番ごとに、觀客全衆の呼號、萬雷一時に鳴るに似たりければなり。是に於て彼好奇心に壓倒せられて、其の劇場の上に何物の起れるにもせよ、之を見るも、能く之を賤しめ之を忘れ得ることを信任して其目を開けり、而かして彼は己の見んと欲せし角鬪者の、其の肉體に受けしに優れる致命の重傷を、己の靈魂の上に受けたり、其の耳を貫く怒號を喚起し、彼の目を開かしめたる犧牲の不憫なる卒倒よりも、彼自ら數等不憫に卒倒し、其の靈魂に最後の留を刺されたり、――輕卒なりし彼の靈魂は剛からず、其の爾に依賴すべかりし時に、己の勇氣に依賴せしかば、弱かりしなり。蓋は彼淋漓たる鮮血を見て、其の殘酷の技に酩酊し、復た面を背くることなく、眼を定め、震怒の酒盃を濺ぎて、知らず知らず交鬪の罪惡に魂を奪はれ、殺戮的歡娛に心醉するに至りしなり。彼は復た茲に來りし時のアリピアスに非ず、反りて其の相交はりし觀者の一、彼を茲に拉し來りし傲岸なる共犯者の一なりき。之より以上我之を言ふを要せざるなり、彼は諦視し絶叫し狂罵し、獨己を茲に引き來りし輩と偕なるのみならず、猶己の順番に於て彼等に先ちて彼等を引きつゝ、再び來るべく刺劇する所の狂氣を以て家に歸りぬ。然も尙且爾は其の剛强なる慈悲の手を以て、之より彼を救ひ出し、己に賴らず爾に賴るべきことを彼に敎へたまへり、是は勿論久しき後の事なりしといへ。然れども此の事件は深く彼の記臆に貯へられて、彼が未來の良藥となりにき。

第九章

アリピヤス如何に竊盜として捕はれし乎。

茲に又彼が猶學生たりし時、即ちカルセージに於て吾が學級に加はりし後、彼の上に落ち來りし他の災難ありき。一日亭午彼市場の公會堂

の中に在り、其の常習に隨ひて、教場にて暗誦すべき詩句を復習したりき。其際爾は彼が公會堂の警吏の爲に竊盜として、捕へらるゝを許したまへり。我思ふ是は爾之を許し、將來然る偉人たるべき彼をして、此の蚤年に於て、人たる者は然く輕卒、輕信に出でゝ、他人の爲に決罪さるべき者に非ざることを學ばしむる爲にしたまへりと。汝知るべし、彼今一人手に手帖と刺筆とを以て、裁判所の前を往來したりしことを、其時正に一個の書生、眞の竊盜、遙に銀工の假小舍の天井を成せる鉛の格子の所まで來り、外套の內に携へたりし斧を以て、鉛を伐り去るべく始めぬ。其の下なる銀工等、斧の音に錯愕し、發見し得る者を捕ふべく人を遣りぬ、此の騷擾を聞き、竊盜は其の斧を棄て立ち去りぬ、其の之を手にしたまゝ捕へられざらん爲なり。

アリビアスは前に人の來りしことを心づかざりしかども、其人の出で去る狀態の蒼皇なるを見て怪み、其理由を知らんと欲して、其場所に至り、落ちたる斧を拾ひ上げ、佇立して之を撿し居たり、其時蚤く、警吏、唯一人居る彼の前に駈け來り、警を起せし其の斧の彼の手に在るを見て之を捕へ、群聚せる商人等の中に曳き來れり。彼等竊盜の、現行犯に於て捕はれしを見て大に喜べり。警吏は彼を行政官の前に曳き行くべかりき。然れども彼の教課は之を以て終を告ぐべかりしなり、蓋は主爾は即時に彼の惟一の證人にて在し、彼の無罪の救護の爲に趨りたまひし故なり。アリビアスの將に曳かれて牢獄若くは所刑に附せられんとするに當り、偶公舍建築の一大工の來るに遭ふ、捕獲者等は此の警吏を見て、得々として面に喜ぶ色ありき、蓋は彼公會堂より物品の遺失するある毎に、彼等に嫌疑を懸けしかば、彼等は今彼が果して眞の罪人の誰なりしやを知るべしと思ひたればなり。

然るに大工はアリビアスが毎に其の招聘に參席したりし某元老院議官の家にて、彼を面識したりしかば、彼は一見彼を認め其手を握りて之

を群衆の外に導き、彼の災難の由來を問ひ、備に其の情實を學びしかば彼は傍觀者の喧噪と威喝とを制し、自ら彼と共に出て來れり。是に於て衆皆罪科を行ひし學生の家に行けり。其家に至り見れば、戸に當りて奴隸の僮あり、年極めて少かりしかば、容易に彼の口より事實を引き出し得べかりき、蓋は彼其公會堂へ隨行したりし己の主人に危害を加ふべきを慮らざりし故なり。アリピアス此の僮を識り居りしかば、大工に耳語せり、大工彼に斧を見して其の誰の物なりしやを問ひしに、我等のなりと彼言下に應へぬ。而して更に數問を試みられて、悉く事實を吐露しき。是に於て罪科は其の家に移され、而して將に彼の背後に凱歌を擧げんとしたりし群民に一驚を喫せしめて、爾の「言」の未來の家令、爾の教會の複雜なる事件の未來の裁判官なる彼は、前より一等智く、一等經驗ある人として悠々として其家に歸りぬ。

第十章

アリピアスの廉潔、チプリヤアスの到着。

我彼を羅馬に於て發見し、鋼銖の鉤を以て吾が身に牽着し、彼を携へてミランに行けり。其の吾が社會より奪ひ去られざらん爲め、又法律の上に實習を得んことを望んでなり。是は己を喜ばさんよりも寧ろ其の兩親を喜ばす爲に、彼の之を學べる物なり。此地に於て彼は既に「助役」となり、而して著しき廉潔の模範を示して其の同胞の目に驚異せられ、同時に彼自ら公平を賣るに金錢を以てする人々を驚異したり。彼の德義は獨り貪慾を以て試みられしのみならず、更に威赫の鞭を以てせられたり。彼羅馬に在りし時、既に伊太利保護金局の長官の「助役」たりき。羅馬に、一の有力なる元老院議官の、人多く之に感荷し又多く之を恐れざるを得ざる者なりき。彼其慣用せる高手的手段を以て、己が

便宜の爲め法律の許さゞる所の或る法令を得んと欲したりき。アリピアス嚴く其請求を拒絶したり。賄賂彼に遺られぬ、彼之を省みざりき。威赫彼に用ひられぬ、彼は其の刺を蹴たり。是に於て人皆此の稀有なる精神を異み視たり、蓋は何等友誼を求めんともせず、又萬殊の方法を以て利害を與へ得る所の高地を占めたる權門の敵愾をも恐れざりし故なり。彼が補佐せる所の裁判官は、己其の請求を非としながらも、公然之を拒絶するを欲せず、其の口實としてアリピアスに非難を加へ、其の己に同意せざるが故に之を許與する能はざることを證明せり。若彼其の法令を造らばアリピアスが其の官を辭したらんは實際太だ明かなりしなり。或時彼廳費を以て自己の爲に書類を謄寫せしめ得ることを聞きたり、此の誘惑は極めて猛烈に彼の文章の好愛に訴へたり。然れども彼は其の正義の念と商量して、其の心を倍善に轉じ、許可する特權に從ふよりも、禁止する良心に從ふことを一等健全なる規則

と思料したり。是は唯一小事に過ぎず、一小事に過ぎずといへども、小事に忠なる者は大事にも忠なり、且夫爾の眞理に由りて言はれし所看過すべからず、曰く(若汝等不義の財に忠ならずば、誰か眞の財を汝等に托けんや。若汝等他の所有に不義ならば、誰か汝等の所有を汝等に與へんや)(路十六〇十一十二)と。此の如き是れ我に密着したりしアリピアスなりき。彼は恒に我と與に如何なる種類の生活を追ふべきかを商議せりき。

チブリデアスも亦我と與に在りき、彼はカルセージに近き其の鄉里を去りて、己の最も多く歲月を費したりしカルセージに背き、父の手より己の手に移るべき富有なる所領と、彼に從ひ來るを肯せざる母とを舍きてミランに來れり。其のミランに來りし理由は、眞理と智慧との渴望の爲に、我と與に住まんと云ふの外ならざりしなり。我が一切の嘆息に答ふる者は彼なりき、我が一切の疑念を分つ者も彼なりき。誰か

幸福なる生活を求むるに彼の如く熱心なる者あらんや、誰か至難の問題に質義の鉾刃を挿入すると彼が如く犀利なる者あらんや、此の三人の者は、實に三個の餓鬼の如く、交互に己の飢渴を口にし、機會に合ひて我等の食餌を爾の授けたまふを待てり。爾の慈悲に由りて吾人の俗務を取れる際に訪問し來る煩悶の下に、我等は毎に之を問へり、吾人が斯く苦しむ理由は何に在り乎と、一切は闇默なりき。而て吾人は愈怨んで而して問へり「何日まで斯くて在るべき乎」(詩百四十五〇十五)と。然り吾人は頻繁に之を問へり、尙且此の世の途を棄てざりしなり、蓋は吾人は猶未だ之に代へて握り得べき何等精確なる眞理を看破し得ざりし故なり。

第十一章

アウガスチン懸念を以て生活の變化を論議す。

我は時々吾が十九歲以後如何に久しき歲月を經過せしかを憶ひ起すに當りて、默考して怪しまざるを得ざりしなり。蓋は我が始て智慧の愛に溺れ、此物を得るや否や、虛妄なる慾望の空望と狂罔とを棄てんと決心せしは實に此歲なりし故なり。而して見よ我今既に三十歲に達せり、尙且固く同一泥土に粘着して、常恒に我を遁れ、常恒に我を惑はす「現在」を享樂せんと欲求して曰く、「我明日發見すべし、眞理は明日顯はるべし、我之を掌握すべし」。又曰く「見よファウスト來りて萬事を說明せん」又曰く「嗚呼希臘の聖人よ、生活の啓導指南車として握り得べき確實なる事物は世界に無き乎」と。又曰く「否吾人をして、極めて熱心に求めしめよ、決して失望する勿れ、見よ敎會の書籍に於て、斯く荒唐に見えし

事物の、毫も荒唐ならず、正當に他の方法を以て解釋せられ得るは、我が既に見得たる所なり、我明白なる眞理の發見せらるゝまで、兩親が我を置きし所の地盤に確く吾が兩足を植つべし」と。

「然れども我何處に眞理を求むべき乎、何處に我之を求むべき乎、アムブロースは省略すべき時間無し、我は讀むべき時間無し、我如何にして其の書籍を得べき乎、何處より、又何處に我之を獲べき乎、誰より之を借り得る乎。我をして吾が時間を作らしめよ、我をして吾が靈魂の救の爲に特別なる時間を定めしめよ。正統主義は我が徒(いたづら)に想像せし所、我が徒に非難せし所を敎へざるなり。其の學者等は神が人身の形狀に由りて限定せらるゝことを信ずることを以て罪惡と敎へたり。且我豈自餘の問題の我が爲に啓かれん爲に門を叩くことを猶豫せん乎。然るに學生は午前の時間を奪へり、其餘の時間を以て我何を爲せる乎、何故之を爲さゞるべき乎。然らば何の時に吾が師友を訪ひて其の援助

を籍るべき乎。何の時に學生に爲るべき講義の準備を爲ん乎。何の時に蘇息を得て課業の爲に緊張したる精神を弛むべき乎。咄一切を一掃せよ、此の如き瑣事を拋ち、我をして全く眞理の探討に奉事せしめよ。人生は禍にして、死は確實なり。若死俄然我に來らば、我如何して此處より逝くべき乎。吾が此の世にて等閑にしたりし事物を、何處にて又研窮すべき乎。否我寧ろ我が此の世にて等閑にしたりし刑罰を受んが爲に、審判を受くべきに非ずや。然し死を一切の煩悶と感覺とを伐除し、之を畢る物と想はゞ何如。是亦研窮すべき物なり。然れども神は其の然かあることを禁じたまへり。堂々たる基督敎の權威が全世界を掩へる事豈徒事ならんや。豈理由なき事ならん乎。若靈魂の生命にして肉體の死と與に滅了せば、神豈吾人の爲に斯の如き大事業を起したまはん乎。然らば何が故に全然、又即時に世俗の希望を拋ち、一身を棄て、以て神と幸福なる生活とを求めざる乎。

「然し待つこと須臾せよ、此の生も亦樂し、其の中に鮮少ならざる甘樂あり。且夫世間的欲望を割斷することも小事に非ず、蓋は之に復歸するこそ恥辱なるべければなり。請ふ看よ、一片の選拔を獲得することは甚だしき難事に非ず、之より以上我復た何の欲望か有らん、我何等有つ所なきも多數有力なる朋友を有せり。又若我自ら主張を提出すれば知事たるを得、是に於て我經費を輔助すべく瑣少の資產ある妻を娶るを得、嗚呼是れ吾が欲望の限涯なり。大凡模範たるべき偉人は、概して智慧の修業と配偶の生涯とを結合したるに非ずや」と。

我が斯の如く語りし間に、旋風我を前後左右に震ひ遷しぬ、時は滑るが如く去れり、尙且我は主に歸ることを遲くし、爾に於て生きんことを日一日と延期せり、然も每日逼り來る死を延期すること能はざりき。我幸福なる生活を愛したり、而も其物の住む所に於て（神の前に於て）之を求むるを恐れたり。我之を求めんとして之より遁れぬ、蓋は我婦人を抱

くことを得ざれば禍なりと思ひし故なり。我此の弱點を治する爲に爾の慈悲の備へたまひし藥劑に考へ至らざりき、蓋は我嘗て之を嘗はず、又之が節制を單に己の力に在りと想ひし故なり。我自ら斯の如き力を有たざることを覺え、又吾が狂愚の中に在りて斯く書かれし事を知りき、「神若し賜はずんば何等の節制も有ること無し」（智八〇二一）と。若我言ふべからざる哀哭を以て爾の耳を掩ひ、確く信じて吾が憂慮を爾に委ねば、爾の之を賜ひしや必せり。

第十二章

アウガスチン、アリピアスと有妻無妻の得失を論ず。

我が妻を娶ることを妨害したる者は彼のアリピアスなりき。彼主張して曰く、若我妻を娶らば、吾人が生涯繼續せんと欲望せる所の安靜な

る知識研窮の事業を、興にすること難かるべしと。彼は其の既に盛年なる當時に於てすらも、非難なき貞潔の士にして、而して其の貞潔は其の青年の初、實際性的快樂の誘惑を受けたりし爲に著名となれりき。然も彼其の誘惑に囚はれず、寧之を觀て羞辱として輕蔑せしが、其時以來彼は完き節制の生涯を送れり。然れども我は彼に反對して妻を娶りて猶能く智慧の愛慕者たり、神の滿足に入り、朋友に忠信且親切なりし古人の例を枚擧しぬ。我は此等偉大なる精神に比すれば、固より負に企て及ばずといへども、唯肉慾の病の甘味に捕へられて、自ら己を縛れる銕鎖を緊縮し、其の或は緩うされんことを恐れたり。是故に我を諫めし彼の智言を斥け、我を放たんとする所の其手を、偏に吾の傷痍を傷むる物とのみ思ひき。

且蛇吾が口に由りてアリピアスに語り、誘惑する係蹄蟠り、吾が舌頭の作用に依りて彼の前に伏して、其の正直にして煩累なき足歩を捉へん

とせり。蓋は彼は其の深く尊敬したりし所の我自身が、彼と此の問題を語る毎に、恐くは獨身生活に耐ふる能はざることを主張するまで、然までに固く黏鳥膠に執へられたりしとはと怪訝しぬ。我自ら彼の此の怪訝に對して辯護する爲、彼の昔味ひて今殆ど忘れたり、隨て卒に之を賤しみし所の輕忽、隱私の快樂の如きは、我が快樂の如き固定したる快樂と比すべきに非ざること、而して此の固定したる快樂に結婚なる美名を附するを得ば、我は決して此の如き生活を輕ずること能はず、彼又我を怪むべからざることを主張しぬ。——是に於て我は言ふ彼亦結婚に對する其の思想を轉じ初めぬ。其の快樂の欲望に掩はれし爲ならず、好奇心に出でゝなりき。蓋は彼の目には然しも幸福に見えし所の吾が生涯が、結婚を缺きては我に取りて唯刑罰と見ゆる外、何等生活する能はざる所以を知らんことを待望すと、彼言ひし故なり。

蓋は何等銕鎖を負ふ所なき彼は、吾が肉慾の、奴隷的なるに驚異し、其の

驚異が經驗に對する慾望を興し、其の慾望よりして實際經驗に遷り、實際經驗よりして更に彼を驚異せしめし所の眞の奴隷に墮落せんとしたればなり。蓋は彼既に死と盟約すべく決心したればなり。危險を好む者は危險に陷るべし。蓋は吾人兩者は結婚の尊敬、別言すれば配偶生活を齊へ、子女を育つべき義務に就ては、唯最も稀薄なる注意を與へしのみなりし故なり。我に在つては結婚は主として己を縛り己を鞭つ所の、飽く無き肉慾を充さんとする猛烈なる習慣なりき、同時に彼は一遍の驚異心の爲に奴隷とし曳かれんとせり、嗚呼爾至高者、吾人の肉體をも見棄ることなき者なる爾が、吾人の禍を憐み、秘密不思議の手段を以て吾人を救ひたまひしまで、吾人の狀態は此の如くなりき。

第十三章

アウガスチン如何に妻を求めし乎。

而て我緊急に結婚問題に壓迫し行きぬ。我既に求婚者たりき。新婦既に聘定せられぬ。熱心吾が母の如きはあらず、彼女の希望は、我が結婚するや否や、救ふべき沒式（バプテスマ）にて我が清潔に濯はるべきことなりき。我が毎日之が爲に準備しつゝあること、又其の熱禱と爾の約束が、將に吾が得信に於て充實せられんとすることを、母は大なる歡喜に溢れて觀望しぬ。尙且吾が要求と彼女自身の衝動とに出でゝ、吾が結婚に關する爾の目的を、異象を以て啓示せられんことを、痛き心の哀哭を以て日々爾に求めし時、爾は之に答へたまはざりき。

勿論母は諸の無益なる想像の產物を見たりき、人間至誠の指摘に由りて揣摩し得べき類の物なり。母は此等を我に語れり、而も爾の天啓を

賜ひしときに懷ける所の確信を以てせず、寧ろ賤しんで之を語れり。蓋は母は其の一種の名狀すべからざる感情を以て、爾の天啓と己の靈魂の結べる夢想とを、能く甄別し得ることを常に稱道したればなり。尙且我は壓迫せられ、約束は一少女に對ひて結ばれぬ。其の少女は結婚齡には尙二歲若かりしかど、其人我を喜びし故に、我喜んで待つことを諾しぬ。

第十四章

彼親友の兄弟主義に基きて。共同生活を營まんことを謀議す。

我朋友の一隊と、人生の猛烈なる憂懼を論じ、之を怛みしか、是の時に及んで我等同人は殆ど一致して俗群を離れて、安靜なる生活を送らんと決心したり。我等思へらく平和は、我等同人の所有を醵出して之を共

產とすること、即ち誠實なる友情に出でゝ彼我の所有を同にし、萬人一個の財囊を持ち、其の全業が各自に屬することに由りて得らるると、又思へらく我等は此の如き會友約十名を數へ得べしと、此の中數人は甚だ富める者なりき、最も富めるは吾が同鄕人ロマニアナスなりき。當時壓迫し來る俗務の憂慮は、彼を年金局に送りたりけり。彼は幼冲より して吾が親友の一なりき。今や彼は吾人の計畫の最も熱心なる辯護者にして。其の言說亦最も重味ありき、其の富他より甚だ大なりし故なり。

吾人は茲に決定しけらく、吾人の中より毎年二人之が管理者となり、大凡必要なる物資を供給し、同時に自餘は全き閒暇を享くべしと。然れども或人には既に之あり、今又我に有らんとする所の細君等が、果して之に任ふべきや否といふ、此の一問を問ふに及んで、此の高尙なる計畫は猶手中に在りて粉齏し、破壞物の如く投げ棄てらる。吾人の心情は

一變して嘆息と呻吟とになり、吾人の足は世界の踏みつけられたる廣き路に轉じぬ。蓋は無數の考慮吾人の胸臆に在りしかども、唯爾の聖旨のみ永久に立てばなり。爾は其の聖旨中に大に吾人の爲る所を笑ひ、反つて爾に至るの途を備へ、其の手を啓きて吾人の靈魂に祝福を充したまふべく、機會に合ひて吾人に食餌を供へたまひき。

第十五章

彼第一の妾の代に第二の妾を蓄ふ。

同時に吾が罪惡は益し加へられたり。吾が妾は結婚の妨害物として吾が傍より引き裂かれ、而して彼女に綢繆したりし吾が愛情は引き裂かれて血涙溢るゝまで傷けられたり。彼女は決して復び男を知るまじと爾に誓ひ、我と我が彼に生ませたる一子を殘して亞弗利加に返れ

り。然れども我は不幸なる人、婦人よりも猶弱く、聘定の新婦を懷き得るまで空しく經過せざるべからざる二年間の猶豫を堪ふる能はざりき。是故に結婚の情子にあらで、唯情慾の奴隷たりし我は、第二の妾を蓄へたり、――我彼女を妻と喚ぶを得ず、――破るべからざる習慣の保護の下に、吾が靈魂の疾患の保養せられて、前日の如く、否前日よりも强壯にして新婦の室家に遷されんが爲なり。且や前の情婦を割かれし爲に受けたる傷痍も、猶未だ平癒せず、唯煩熱、脈搏の已みしのみ、而も漸次靡爛し初め、苦痛愈少くして、危險愈大ならんとせり。

第十六章

彼一日も死と審判の愷悌を忘るゝ能はず。

嗚呼慈悲の源泉なる爾、讃美は爾の有、光榮も爾の有なり。我愈窮める

とき、爾愈接近しいませり。爾の右手我を泥濘より抽き出して我を助けんと、漸々徐々に我に近づけるを、我之を知らざりき。且夫我を肉慾の快樂の深坑中より喚び返さん者何物も無かりき、唯死と、來るべき審判とありしのみ。是は絶へず變轉せる吾が持論を貫通して、未だ嘗て吾が胸中より滅却すること無き物なり。我、友人アリピアス、及びプリデアス等と善惡の性質を論じて謂ひけらく、吾が判斷に據るときは、若し靈魂の生命、善惡の應報、死後に繼續することなど、エピクラスの信せざりし事物を我が信ずるに非ざりせば、凱歌を擧ぐる者は必ずエピクラス〔譯註、希臘の快樂論者〕なりしならんと。

不死を得て肉體の不斷の快樂の中に之を失ふ憂なくして住みし塲合を置きて吾人が茲に問はんと欲する所は、何が故に吾人は幸福ならねばならぬ乎、又幸福以外吾人の欲望し得るもの何か有るやと云ふ是なり。嗚呼我己が不幸の源因正に茲に在りしを知らざりしなり。吾が

不幸とは肉眼にて見る能はず、唯靈魂の眼のみ見得る所の美の光、即ち其自身の爲にすら抱容せざるべからざる所の美の光と、德の光とを鑒識する能はざるまで、然までに墮落し盲化したりしことなり。我又何が故に此等の難題を、其の恥づべきにも拘らず、朋友と之を論じて快樂を得たりし乎。又一方には吾が肉慾の快樂の密雲如何に濃厚なりしに拘らず、當時我に涵養せし所の幸福の說に由りて判してすらも、我は朋友を缺きては幸福なること能はざりしは何が故乎、嗚呼我其の理由を考察せざりき。尙且我朋友を、朋友の爲に愛せしことは明にして、隨つて朋友も亦我が爲に我を愛せしことを感じたり。

嗚呼是は如何なる邪徑なりし乎。爾を棄てゝ優れる者を求めんと望む所の輕卒なる靈魂は禍なる哉。此かる者は背に腹に、兩脇に展轉反側す、而も臥床は石よりも難し、〔眠息を得ざるの意〕。唯爾獨安息したまふ、見よ爾近く在せり、我を漂泊の禍より救ひ、吾人の兩足を爾の道に樹

て、吾人を慰めて曰たまはん、「越れ我爾を移さん、我爾を其の故郷に伴ひ、而て汝に自由を與へん」と。

第七篇

彼其の壯年の發端、即ち其の三十歳の事實を回顧し、當時に於ける其の無智の暗黑如何に前よりも深厚なりしか、又神の性質に關する諸の誤解、惡の起原に關する許多の淺ましき昏惑を經過して、遂に如何にして神に關する正當なる智識に達したりし乎を語る。唯猶主キリストに就て、無益の議論を主張せしのみ。

第一章

彼神を無邊の空間に流布せる所の具體的實在として考ふ。

醜惡にして又醜辱なる吾が青年時代は此時に及んで死したり、我今中年に進入したり、而も吾が年齢の益すが如く、吾が輕卒も亦益し來れり。我實體に就きては、見るべき事物の外何等考ふる所ある能はざりき、尙且我は復た爾吾が神を人身の模型の下に考ふること無かりき。我常に耳を哲學に傾けたりし故に、常に此の過失を避けたり。而して此點に於ける眞理を、精神の母なる爾の正統敎會の信仰に發見することを慶ぶ。尙且我は之(具體的實在)以外に爾に就て考ふべき所以を見るを得ざりき、我既に人なりしとはいへ、又此の如き人なりしとはいへども。我爾の觀念を不朽、不變、乃至不可犯なる者と型らんことを勉めぬ。我

吾が全心を以て爾の不朽、不變、而して又不可犯なることを信せり。蓋は我自ら――如何して又何が故なるかを知らずとはいへ、尙且我は明白に、疑問以上に朽敗は不朽に劣り、不變は變化に優り、不可犯は其の反對よりも勝れることを察せし故なり。

吾が心痛く凡の空想に反撥し、此の一事の確實を以て、一切吾が心眼の上に浮游せる所の不潔なる蚊蠅の聚群を一掃し去らんと務めたり。然れども之を一掃し了りし刹那、蚊蠅は又もや聚りて吾が面に打ち下(おろ)し、吾が心眼を遮りぬ。復(また)や人身を有せる神を思惟せざりしかど、尙且我は空間に亘り、世界を貫き、世界の周圍なる無限界に弘布せる所の一種の肉體として神を想像するを免れざりき、而して此の如きは我が謂はふる不朽、不變而して不可犯なる物、朽敗し變化し犯辱すべき物よりも優れる所の實體なりき。蓋は我に空間より此の容積を取り去りし餘は、無――絕對無にして、空虛にてすらも無かるべく見えし故なり。

蓋は縱令一物體空間より取除かれ、而して空間の其部分にして、其の一切の內容即ち土、水、風、乃至天を空じ去るとも、尙且虛しき空間、測量すべき無の存在するあればなり。

當時吾が觀念の粗陋なるは此の類なりき、即ち我は自我を見る能はざりしに拘らず、大凡長、厚、廣、硬を有せず、又此の如き屬性を帶びず又帶ぶる能はざる物は、絕對に有ること無しと。蓋は當時に在つて吾が精神は專ら吾が肉眼の見慣れし所の有形物に類似したる觀念をのみ論議し、此等の觀念を型くる思想の作用其物の無形なることを見得ざりし故なり。我は思想の作用が測量し得べき物に非ざるよりは、觀念を型るを得ずと主張せしなり。是故に又吾が生命の生命なる爾を思惟して、無邊の空間に彌漫し、世界の全塊を貫通し、八表の外際涯を知らざる無限に到達せる者とし、是故に海洋、天空、一切萬物は爾を以て充滿せざれ、爾は毫も限定せらるゝ所無く、又同時に爾に由りて萬物は限定せら

るゝ者なりと思ひき。

地上の空氣の體が日光の途を遮らず、日光反りて空氣を貫き、之を分裂することなくして反つて之を充たせる如く、我思ふに、同一の方法を以て爾は天空、空氣、海洋、乃至大地一切をば舉つて透過し得べく、一切其の大小の部分の中に貫注するを得べき者なり。是故に一切は爾の嘘吹を受け、爾の現在を許容し得、又此の爾の現在が內より外より爾の造りし一切萬有を齊へたまふと。此の如きが吾が想像なりき。蓋は我之より、外吾が思想を組織するを得ざりしなり。然も此は尙虛妄なりき、蓋は此の方法に據るときは、大地の中大物は爾の大分を保有し、小物は小分を得るに過ぎざればなり。萬物爾に由りて充たさるときは、此の如き意味となるべし、曰く象は雀より爾の多分を有せり、是れ一は他よりも大なればなりと。而て爾は爾の肢體と世界の肢體とを、斷片的に、大を大に小を小と結合したらんと。嗚呼是れ爾の性質に非ず、然れど

爾猶未だ吾が暗黑を照破したまはざりけるなり。

第二章

マニ教徒を論破する爲、チブリデアスの慣用せる議論。

主よ我此等欺罔する所の欺罔者、沉默なる多辯者、——爾の言、彼等の口に響かざるが故に沉默なり、——に對して十分なる答辯を有したり。吾が謂はふる十分なる答辯とはカルセージに在りし昔日、チブリデアスの慣用して吾人一般之を聞く者を震ひし物なり、曰く「爾にして戰鬪を拒絕したまはば、マニ教徒が爾に對して戰陣として排列したる所の此等闇黑に居る迷信軍隊が爾に何を爲すを得ん乎」。若彼等答へて、其の能く爾を毀害し得と曰はば、爾を以て朽つべく犯すべき者となすなり。之に反して其の何等爾を毀害するを得ずと曰はば、一切戰鬪に對

する理由ある無し、況んや此の如き戰鬪に於てをや。此の戰鬪に由りて爾の一分、爾の一肢、爾自身の實體の一子は、爾の創造の威能に非ざる反對の威能の爲に混淆せられ、此の威能の爲に由りて朽され、虧かれ、幸福より災禍に變へられ、而して是故に爾の輔助に由らざれば救はれ潔めらるゝを得ざるなり。此の一子とは即ち是れ靈魂なり。而して之を其の幽囚、不潔、朽敗の中より救ひ出す所の爾の「言」は、必ずや自由、清潔、不朽ならざるべからざるに、尙且彼の假定說に據れば「言」自身、靈魂と同一實體なるが故に腐敗したる者なり。

是故に若彼等にして爾の性質、即ち爾の由て存せる實體の不朽なることを許さば、其の敎理全體が虛妄醜怪ならざるべからず。若爾を以て朽つべき者とせん乎、是は發端より虛妄にして之を口にするや否、震怒を以て絕つべき物なり、故に我言ふ、此れ彼等欺罔者に對ふる十分なる答辯なりと、彼等は己が食傷せしめたる輩の爲に、吐き出さるべきもの

なるなり、蓋は彼等は其の口と心とを以て恐しき冒瀆の言を放つに非ざれば、此の難局を脫がるゝ何等の走路あることなし、其の爾に就て此の如き事物を思惟、言說せる間は。

第三章

罪の源因は自由意志なり。

嗚呼主よ我既に眞の神、獨吾人の靈魂のみならず、又我等の肉體を造り又、獨吾人の靈魂と肉體とのみならず、更に宇宙萬有を造りたまひし爾は、汚染、循環、又變化の陰影を解脫したまへりと確信、斷言せりといへども、猶未だ鮮明に惡の源因を握り得ざりき。然れども惡の何物なるやに關らず、我は思へらく寂然不動なる神に動搖を歸せざるを得ざるが如き解釋を我決して執るべからず、是れ我自ら今研究しつゝある所の

惡其物と爲ること無からん爲なりき。是故に我吾が全心を以て退避せし所のマニ教徒の唱道する事物は、決して眞なるを得ずと確信して、虛心、坦懷、探討の歩を追ひぬ。蓋はマニ教徒の惡の源因を問はるゝに當りてせる答辯は、邪なる驕慢を以て命令せられ、而して其の答辯は彼等自神の惡を行ふ性質よりも、寧ろ爾の性質が惡を受くるに堪ふべきことを是認せんとすればなり。我又今正に我に語られし所の事、即ち吾人の惡を行ふ源因は、意志の自由に存すること、又爾の義判が吾人が惡を苦む源因なることを觀察せんことを嚴恪に試みぬ。

是故に我は其の深坑よりして吾が心眼を擧げんとし、我が之を擧げんと努むるや忽ち又落ち返りぬ。我數回之を努めぬ、而も幾回となく落ち返りぬ。偶一事の我を擧げて爾の光明に向はしむるありき、他なし我に意志あること、我之を我が生きたりし事の如く精確に知れることなり。是故に我一事を爲さんと意志し、又之を爲さゞらんと意志する

ときに、是れ他人の所爲に非ず、我自ら之を意志せることを我は絶對に確認したり。而して我は惡の源因の茲に伏在せることを察知すべく初めぬ。我吾が意志に反して行ひし事物に於て、我は行ひし事よりも寧ろ苦みし事を看取れり。斯の如き行爲を我は罪科としてよりも、寧ろ刑罰として見き。是は我に相當せしものなりと我が疾く告白せし所なり、蓋は我爾の正義に在すことを感ぜざるを得ざればなり。

然れども我更に請ひ問ふ我を作りし者は誰乎、吾が神、即ち唯善なるのみならず、更に「善」其物なる者に非ずや。我如何にして惡を意志し、善を意志せざるに至り、而して吾が刑罰の爲に正當なる理由あらしめたる乎。誰か惡を吾が衷に安き、我は全然甘美なる神の手工なりしに當り、誰か此の苦辛の根を吾が內に植へし乎。若惡にして難すべくば、誰か惡魔其物を造りし乎。若彼本來善なる天使にして、己の邪惡なる意志に由りて惡魔と化せし者とせば、彼が由て以て惡魔となりし其の邪惡

なる意志の、彼の中に在りし所以は何が故乎。此等の疑問の爲に我再び壓倒せられて悶絶したり。尙且我は過失の地獄に墮ちざりき。此處に在ては何人も爾を讃めず、此處に在つては、人惡を行ふに非ず、爾の惡を許すものと思惟せられぬ。

第四章

神の不朽なるべき所以。

殘餘の難問を解かんとする吾が努力に於て、我は爾來眞理として不朽は朽敗よりも貴きことを斷言し、隨つて爾の性質の如何なるにもせよ、爾は不朽に在すことを許認せり。蓋は何等の靈魂も、最上善なる爾に優る物を發案せず、又するを欲せざればなり。然れば不朽の朽敗に勝れること、疑問を容るべからざるが故に(今猶之を許す如く)、若吾が神に

して不朽ならずば、吾が思想內に爾より優れる物を思ひ起し得るなり。然れば我不朽が朽敗の上に位すべきことを見しや否や、我爾を茲に求め、而して惡即ち腐敗の起原を其の發端よりして尋ねざるを得ざりき、爾の實體は腐敗の爲に犯さるべきに非ざればなり。

選擇に由るも、必至に由るも、乃至は錯愕に由るも、敗腐が神を穢すこと能はざるは明けし、蓋は神は神なればなり、其意志する所は善にして、彼は即ち善其物なればなり。然れども腐敗するは善に非ず、將た爾は爾の意志に反きて事を爲すべく强ひらるゝ者に非ず、蓋は爾の意志は爾の威能より大なるに非ざればなり。爾が爾自身より大なるに非ざれば、是は彼より大なる能はず、蓋は神の意志と威能と、即ち是神自神なるが故なり。且夫何物が錯愕を與へて神の心を奪ふを得るや、蓋は爾は一切を識る、爾の之を知るに由るに非ざれば、何等の事物も在らざればなり。然れども我は何が故に神たる實體の腐敗するを得ざることを

論證する爲に、斯く徒に言說を費せり乎、蓋は若し然るに非ざれば神は神に非ざるべければなり。

第五章

彼更に問ふ、惡何所よりして來る乎、惡の根は何なり乎。

我惡の何所よりして來りし乎を求めぬ、我之を惡く求めて吾が穿鑿の中に伏在せし惡を見ざりき。我吾が靈の眼の前なる一切の所造物を驚異せり、即ち凡見るべき物は、土地、海洋、空氣、星斗、草木、禽獸又凡見るべからざる物は上なる蒼穹、一切の天使、一切の靈物等なり、此等〔見えざる物〕をも亦其の形體を有せる物なるかの如く、吾が想像は其の位置此の位置に按排せんと試みき。我已に爾の造りし萬物を一大魁として、即ち或は眞の物體、或は靈の代りに我が空想せし所の物體等、萬殊の物體

より組織せられたる物として圖表したり。我は此の一魁を然く巨大なる物、其の實際の廣袤に於てに非ず、我が肆に考へし如く大なる物にして、唯其の各邊に於て有限なるのみと圖表し、而して主よ我爾が隨所より之を包圍し、隨所に之を貫通せる者とし觀じき。恰も茲に隨所に海水あるが如く、隨所に無邊の空間を通じて無邊の海水の外一物あるなく、其の海水の中に一個巨大、尙且有限なる海綿あり、其の海綿、無邊の海水に當つて其の一切部分を延長したらんが如し。此の如く爾の無邊を以て爾の有限なる所造物を充たせりとして圖表し、自ら己に向つて謂ひけらく、神を見よ、神の造りし物を見よ、神は善なり、永劫無限に其の作より優れり。然も彼の善なる如く其の作も亦善なり、蓋は彼如何に其の所造物一切を懷抱、貫盈せるかを見よと。

然らば惡は何處に在り乎、何處より來りし乎、如何なる罅隙より此其の起原を取りし乎。何物か之が根たる、何物か之が種子たる乎。若くは

吾人は惡を有る無しと思ふべき乎、若惡にして有る無くんば、然らば何が故に吾人惡を恐れて惡を閉づる乎。蓋は吾人の恐怖を理由なしとしても、尙且其の恐怖其物是れ惡なればなり、蓋は非有の爲に其胸を貫き之を苦しむるが故なり。然り若何等恐るべき物なきに尙且之を恐れば是愈惡しとす。然らば則ち吾人が恐るゝ事是れ惡なるか、然らざれば恐怖其物が惡なるか、二者其孰にかあらざるべからず。然らば惡何處より來る乎、善なる神一切萬有を善に造るを見ればなり。神は大なる善又王たる善にして、其の作は小なる善と云ふこと是なる乎、尙且創造者と所造者と、均しく是れ善なるなり。然らば惡何處よりして來る乎。彼其命じ、形くり、整へし所の惡物を以て、其の萬物を造り成し、而も其の善に轉ずるを得ざる所の殘滓を遺留せしめしものなる乎。然らば其物何が故に舊と有りし乎、彼何等の惡も殘るべからざるやう、其全體を變化すること能はざりし乎、彼全能なるが故なり。畢竟するに

彼何が故に此の如き資料よりして萬物を造らんと欲せし乎、何が故に彼寧ろ其の全能の威力に由りて之を滅絕せざりし乎。又若惡にして永刼なりしならんには、彼の之を無限の過去世に用ひずして、今俄に之より或物を造らんと決定せし者は抑又何が故乎。

今假りに彼卒然作動すべく決せりと想像せんに、彼全能者は此の汚染ある實體を禁絕して、彼自身なる完全、眞實、至尊、無限の「善」を以て實在するを欲せざりし乎、若善なりし所の彼にして善なる物を造設せざることを善ならずとせば、彼惡物を滅ぼして、其の所造物の爲に善物を造るを欲せざりし乎、若し彼己の造らざりし物の資料無くして善を造る能はざりしならば、彼の全能は何くに在るや。我此等の疑問を己が憫むべき方寸にて考へぬ、而して此の不幸の上に刺戟を加へしは我が眞理を發見するに及ばずして死せんかと云ふ恐怖なりき。唯爾の聖者、吾人の主、救世者に於ける信仰が、固く吾が心に粘着したる正統敎會に由

りて我を敎へぬ。其の信仰猶未だ統一を缺き、又敎理の正系を外れたりしかども、其にも管らず吾が心之を執りて失ふことなく、日日漸除に之を增し加へぬ。

第六章

彼星占術を棄つ。

此時に及んで我又欺罔的ト筮、即ち星占術の不虔なる妄語を棄てたり。——嗚呼吾が神、茲に又爾の慈悲をして吾が靈魂の極奧隱栖よりして爾の前に告白せしめよ。蓋は爾——是れ疑なく爾なりし故なり、然らずんば爾より外なる誰か、吾人を、永劫死せざる「生命」にもあらず、自らに光を要せずして吾人の迷へる靈魂を照し、全世界を統率して風に翻る木葉に及ぶ所の智慧にもあらざる、死と云ふ一切謬妄よりして誰か吾

吾人を喚び回へせし乎)——汝吾が頑冥不靈に對して救治の便宜を備へたまへり。我此の頑冥不靈を以て彼の賢明なる老人の弁ンデシアナスと、推服すべき青年のヲプリデアスとを抗拒しき。前者は積極的に、後者は幾分の躊躇を以て。然しながら反覆して、ト占の何等技術に非ざると、唯神託の屢眞實を告ぐる如く、星占者の揣摩も亦然ることを斷言せり。蓋は之を敢てするの人は何等知る所なく唯何等言ふ所なきに由つて眞理に命中すること多數の中には多少起るべき故なり。我言はん、爾は星占者の常客なりし一朋友の身上に於て、我に救治の術を供へたまへりと。彼は成年の人に非ず、又奇術書を研究したる者にも非ず、我が言へる如く單に星占者の常客なりき。然れども彼は其の父より學びたりと云ふ所の數個の事實を識れり、其の事實なる物は唯該技術の名譽を傷くるに止まる物なることを、彼自ら知らずとはいへ。フハアミニアス、是れ彼の名なりき、彼世間的の敎育を受けたる博識な

る修辭學者なりき。偶此人我を其の最も親愛なる朋友として、我に諮るに一の俗事を以てせり。之に就て彼は大なる待望を有したりしが、彼は特に我に問ふに其の事、果して彼の星占(同人輩が曰へる如く)と相應ずべきや否を以てせり。此時我既にヲブリデアスの說に傾き初めたりきとはいへ、吾が星占に關して疑團を懷けることを我猶未だ彼に開示せざりき。唯彼に答へて曰く、我今殆ど星占學の愚なるを悟れりと、彼は之に對へて我に告ぐるに其父の星占學書の精讀者なること、其の父が、同じ熱心を以て彼と與に此の問題を考究する所の友人を有ちたる事を以てせり。彼曰く此の二人は其の共同の研究と屢次の會話に由りて、其の荒唐事件に對する氣焰を煽り擧げられて、遂に各其の住居近邊の家蓄の生產の時刻を記錄し、而して此の謂はゆる技術の爲に、觀察を蒐集せんとて其の星占を拋つまでに至れりと。

フ、アミニヤス更に曰ふ、而て吾が父我に此の事を語れり、吾が母將に

我を生まんとする時、其の友人の女奴隸も亦子を孕みき。此事や無論狗兒の生產をすら、至細の注意を以て日記に記するほどの主人の知る所となれり。然れども一は其の妻の爲に、他は其の女奴隸の爲に、兩者各勤勉なる精査を以て其の生產の日、時、刻を推算したりし同時に、偶然にも二人の婦人同日同刻に其の子を生む事となれり。是故に彼等は正嗣の爲、又奴隸兒の爲、同一星占を作るの已むを得ざるに遭遇せり。蓋は生產の劬勞發せしとき、二人は交々其の家に起りつゝある事を報告すべく、交々使者を相遣れり。而して其の使者を用意するや、彼等が實地の生產を聞知せば、即時に交々出立すべからしめ、而して各其の力の許す限に於て、一刹那の猶豫も無く生產の事實を聞知すべき準備を爲したり。今や此等の使者が正に兩家の中央にて交錯し、運星、即ち生誕的感動の位置、に於て些少の差異を認むる能はざるほどなりき。フ、アミニアス曰く我は良好なる位置に生れ、迅くも人生の光明なる路

に進み、富有となり、上流に位し、同時に其の奴隷兒は彼を知る人の我に傳へたる如く、其生れしまゝの位置に留まり、依然其の軛を負へりと。

我此の說話を聞いて之を信せし時、(蓋は說者の信ずべき人なるが故に)、吾が諸の疑團は一掃せられぬ。我即時にフォアミニアスに說いて其の迷信を棄てしめんと勉めたり。我說て曰く「我君の星座を撿するに當りて、其の星座に於て君の兩親の幸福なる位置の人なりしこと、君の家族が其の鄕市に於て高貴なりしこと、君の生誕の自由としてなりしこと、其の養育の善良なりしこと、其の敎育の世間的なりしことを讀み得たるに非れば、精確なる答案を與ふること能はず、又若其の奴隷が同一なる星座に關して我に諮詢したらんに、(蓋は此の星座が又彼のなるが故に)、我之に於て其の卑賤なる家族、奴隷の境遇、乃至前の解說に正反對なる一切の事情を讀み得たるに非ざれば、精確なる答案を與ふること能はず。然らずんば我苟も正當を得んが爲に、如何にして同一の事實よりして反對の結論を抽出せざるべからずとする乎。而も尙且同一結論を抽出せんには無論錯誤なからざるべからざるなり。是故に我明白に斷言するを得、彼等星座を讀むと自稱する輩が命中を得るに當り、其の成功は技術に非ずして偶然に歸すべく、其の誤るに當り、其の失敗は技術の未熟に非らで、偶然其物の欺騙に歸すべきなりと。

其の法斯く明白となりしからには、我一刻も失はず、此の下等なる職業に從事せる狂妄者の前に飛び往き、其の虛妄を暴露して一般の笑柄と爲さんと待ちにき。然れども彼輩或は答へて曰はん、是れフォアミニアスの爲に誤解せられたるなりと。然らずんば又曰はん、フォアミニアス其の父の爲に欺かれたるなりと。是故に我心を此の事實の考慮に潛めて、吾が想察を双生兒の場合に傾けたり、蓋は彼等は同時に相次で其の腹より出で來り、其の間隙は、事物の性質上、彼等之に如何なる價値を歸するにもせよ、人目の測度し得る所に非ず、細言すれば星占家が

正確なる預言を爲し得る前に讀まざるべからざる所の星座の圖表の上に、精確に認識せられ得ざるほどのものなればなり。然らば則ち彼の預言は必然正確なるを得ず、蓋は彼同一の圖表を讀みたる後、同一の運命をエサウとヤコブ(一)の爲に說き出すべければなり。然れども二人の傳記は同一に非ざりき。是故に彼は到底錯てりしなり。然らずして若彼正確なりきとせんか、彼は同一の圖表に於て、反對の運命を讀みたる者ならざるべからず。果して然らば彼の正確は技術に由るに非ず、偶然に出でたるなり。蓋は主、爾、最も正しき宇宙の主宰者が不可思議なる衝動に由りて、熟練者と訊問者の間に一樣に働き、其の靈魂の秘密なる賞罰を、爾の正しき審判の神秘なる作用に從ひ、彼等各自をして其の當に聞くべき所の事物を聞かしめたまへるなり。此の神の審判に對して、誰も「是は何ぞや、是れ何が故に然るや」と謂ふこと勿れ。嗚呼是れ決して謂ふべからざるものなり、蓋は汝は人なればなり。

(一)アブラハムの子イサク、其妻リベカに由りて生みし双生兒。

第七章

惡の起原の疑問彼をして痛心を極めしむ。

嗚呼吾が「救助者」、爾既に我を此等の桎梏より放ちたまはりしかば、我今更に惡何處より來りしかを問ひて、何等の活路を看出し得ざりしかども然れども爾は疑問の波瀾が吾が信仰を洗ひ去るを許したまはざりき。吾が信仰とは爾の實在したまふこと、爾人を心に記め、之が審判を爲したまふこと、爾其子我等の主耶蘇基督に由り、及び爾の正統敎會の權威の保護する所の聖書に由りて、救拯の方便、死後の生命に至るべきの道を設けたまへる事どもなりき。如上は是れ吾が心腔に固く根ざして吾が格言となれる物なりき。是に於て我一心不亂に問ひ進みき、曰く

惡何處より來りしかと。嗚呼吾が神、如何なる懊惱を以て、如何なる呻吟を以て、生産の苦を我が胸臆が嘗めたるか、我之を知らずといへども、爾の耳備に之を聞きたまへり。我吾が全力を擧げて默して答を求めしとき、吾が靈魂の言ひ難き悔恨は、痛く啼いて爾の慈悲に愬へしなり。嗚呼我如何ばかり苦みしか、人知らざるも爾は知しめす、我自ら言辭を以て之を吾が親友に告げ得しもの幾何なりしか。我が之を語らんとして、時をも語をも有せざる所の吾が靈魂の惱亂の全班の、如何で彼等に傳へ得べかりし乎。然れども其の一切は爾の耳に注がれたり。乃ち爾の耳に注がれたりといへ、其の間我吾が心海の不安の爲に呼號し、吾が渴望は爾の前に至り、吾が目の光我と共なりしなり。蓋は其の光爾の中に在りしかども、我は爾の外に在りき。且其の光は場所の中に〔空間〕に在らざりしに、我は唯空間に包容せられし事物をのみ思料せしかば、此等の事物に何等安息すべき者を發見するを得ざりしなり。彼

等は我を歡迎せざりき、是故に我唯言へらく、「善し既に十分なり」と。彼等も亦我が十分善き境界に達し得るまで、吾が進入するを許さゝりき。蓋は〔我が進入せんとする理由は〕、我爾よりは劣れりといへども、彼等〔空間中の事物即ち一切の所造物〕よりは優りたりき、爾は其の造りて我に劣らしめたまひし物を、我に服せしめたまひし故なり。〔詩篇第八篇の主意〕

是は爾の像に居るべき金方、即ち己の體を服せしめて以て爾に仕ふべき、救拯に至るの中道なりき。然れども我が傲然爾に向ひて、吾が擧動を肆にし、吾が硬頸と楯面を以て主に背く時に當り、此等我に劣れる事物すら、我が上に重く壓かゝり、我を壓潰して呼吸すべき休息も時間も無からしめたり。彼等は八方に於て隊伍を爲し、頑固なる大塊として吾に目に邂逅し、我が思惟せんとするに當り、此等の物象一齊に我に向ひて〔汝何處に往んとするや、此の無能者不潔者よ〕と叫ぶが如く見えて、

以て吾が逃飛を妨害せり。是は皆吾が傷痍より起り來れり。蓋は爾は驕ぶる者を傷きたる者の如く卑したまへり、我は己の張滿せる傲慢の爲、爾より分割せられ、吾が腫れ膨れたる顏面は吾が目を閉塞するまでに及びたりき。

第八章

神の慈悲如何にアウガスチンを鞭笞せしか。

嗚呼主、然れども爾は永劫住まりたまふ、而も永劫吾に向ひて怒りたまはじ、蓋は爾は唯塵と灰とに過ぎざる所の吾人人類に慈悲を垂れ、爾の目の前に吾が醜體を改造することを好したればなり。爾朴を以て我を追ひ、吾が靈眼に爾の見ゆるに至るまでは、我をして休む能はざらしめたまへり。是に於て吾が一切の傲慢は密かに觸るゝ爾の治醫の手の下に退き、吾が煩らひ晦れる眼は、劇烈なる膏藥の治醫的切痛の爲に日一日と痊されぬ。

第九章

彼プラトー派の書籍の中に永劫の「言」の神性を發見したるも、極現せる「言」の謙卑を發見せざりき。

萬事に先ち爾我に敎ふるに、其の如何に驕ぶる者を斥け、謙る者に恩寵を加へたまふか、又爾の「言」が肉體と成りて人の中に住みたまふ事に由りて、人に謙遜の道を示したまふことの、如何ばかり尊きかと云ふ事を以てせんが爲に、爾は巨大なる虛榮心を懷いて膨れ揚がりし一個の人の作用を經て、希臘語より羅甸語に譯されたるプラトー者流の著述數冊を己が手に獲しめたまへり。我此の中に、精密に同一の言語を以て

せるには非ずといへども、精密に次に言ふ所と同一なる眞理が、其の許多、汎種の議論に由りて確認せられたるを見る。其の眞理とは「太初に言あり、言は神と與に在り、言は即ち神なり。此の言は太初に神と與に在りき。萬物彼に由りて造くらる、造られし物に一として彼に由らで造られしは無し、彼に生あり、此の生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき」(約一〇一—五)と云へる是なり。又更に人の靈魂は光に就て證を爲すとはいへ、彼は其光に非ず、唯神、即ち神の「言」が、世界に來り凡の人を照す所の眞の光なりと云ふ是なり。而し又「彼世に在りき、世は彼に造られたるに世は彼を知らざりき」と云ふ是なり。然れど「彼己の物に來りしに其民之を受けざりき、彼を受け其名を信せし者には彼之に權威を與へて神の子となせり」(約一〇十—十二)と云ふことは我其中に發見せざりき。

我又茲に、神即ち「言」の「血に由らず、肉に由らず、又人の意に由るに非ず、肉

の意に由るに非ず、唯神に由りて生れし」(約一〇十三)ことを發見したり。然れども「言肉體と成りて吾人の內に住める」こと、是又其の中に發見せざりしなり。我又此書に、屬辭異りたる熟語に於て、「子父の形を以て在り、父と匹くある所の事を棄て難き事と思はず」と云ふ意を散見す、蓋は彼性質に於て神と同一實體なるが故なり。然れども「彼己を虛うし僕の貌を執りて人の如くなれり、既に人の如き形狀にて現れ、己を卑して死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受るに至れり。是故に神は甚しく彼を崇めて、諸の名に超る名を之に予へ給へり、此は天に在る者、地に在る者、及び地の下に在る者をして、悉くイエスの名に由りて膝を屈ましめ、且諸の舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚して、父なる神に榮を歸せしめん爲なり」(腓二〇五—十一)と云ふが如きは、此等の書籍の包藏せざる所なり。

一切時以前、一切時以上に、爾の獨子、神と與に永劫に不變に存すること、

一切の靈魂が恩寵を得んが爲には、彼の充實より受くべきこと、其の賢智ならんが爲には、彼の永劫の智慧の共有に由りて更生すべきこと、此は乃ち此の中に在り。然れども彼時に及んで罪人の爲に死にしと、爾其の獨子をも惜まずして、大凡吾人の爲に彼を授けたまひしと、此等は此の中に無き所なり。蓋は爾此の事を、智者に隱して赤子に顯はしたまひしは、大凡疲れたる者重を負へる者、彼に來り、彼其の心柔和にして謙る者なるが故に、其の彼等を救はんが爲、又彼柔和なる者を正しき道に導き、謙遜なる者に其の道を敎へ、吾人の患難と苦惱を顧み、吾人の一切の罪を赦さん爲なり。然も自ら高等知識と稱する所の長靴を穿ちて濶步する者は、「我に學べ我は心柔和にして謙りたる者なれば、汝等心に安息を得べし」(太十一〇二九)と曰ふ所の彼に聞かじ、彼等は神を知るといへども尙且彼を神とし崇めず、又謝せず、反りて其思念を亂し愚昧なる心晦まされ、自ら智者と稱へて愚者となれり。

是故に我亦其の中に「讀みし如く、彼等は百の不朽の神性を變へて諸種の偶像に模造し、朽つべき人、又鳥、又獸、昆蟲の肖像、即ちエサウが之が爲に其生得權(長子權)を失ひし所のエジプトの肉に似せたり。蓋は爾の首出の民(猶太人)は爾を拜するの代に獸類の頭を拜し、心を埃及に向ひて轉じ、爾の肖像なる其の靈魂を、乾草を食ふ所の犢の偶像に傾けたればなり。(靈界に向上せず、反りて物質界に固執するに喩ふ)此等の事物を我此の中に發見せり、而も我之を食はざりき。蓋は兄(エサウ)は弟(コブ)に仕へん爲、爾の異邦人が遺業に呼ばれん爲(神の兄を棄てゝ弟を取り、猶太人を棄てゝ異邦人を取りたまふやう)ヤコブの短所に對する非難を取除くは、爾の心に適へばなり。

我は異邦人の中より爾に至れり、我爾が其民をしてエジプトより運び去らしめんとしたまひし黃金の上に、(オリゼン)前に哲學を以て黃金に比したり、)吾が心を安置せり。蓋は其の何處に在るにもせよ、爾に屬す

る者なればなり。爾は其の使徒の口に由りて、アゼンス人に、吾人人類の爾に由りて生き且動き且存ふることを告げたまひし故なり。而して此れ正に彼等の詩人の均く稱ふる所なりき(徒十七〇二八)。而して此等の書籍實に其地より來りしなり。然れば吾が心はエジプトの偶像の上に安置せざりき。彼等は爾の黃金を鑄て神の眞相を虛妄に代へ、所造物に拜し仕へること創造者にも優りし者なればなり。

第十章

アウガスチン神の眞理を見ること漸く益明になれり。

此等の書籍の顧て自心に返るべき諫告に促されて、我は爾の啓導を得て吾が靈魂の密室に返れり。是は爾我吾が援助者なりしが故に之を爲し得ぬ。我其の密室に入り、吾が靈魂の神通眼を以て、茲に吾が靈魂

の眼吾が智力の眼を超絶して、不變の光あることを發見したり。是は固より一切の肉眼の見得る所の尋常一樣の光に非ず、又日の光の漸く昇りて漸く輝き、八荒に流射するが如きに比すれば更に大にして、然も同種の物に非ず、是は此の如き類の物ならず、有らふる地上の光耀より全く異りたる物なりき。將た又其の吾が智眼の上に在るや、油の水の上に浮べるが如く、天の地の上に在るが如く然るに非ず、其の高きは我を造りし故にして、其の低きは我が之に造られしが故なりき。眞理を知る人は其の光を知り、其の光を知る者は永劫を知る、愛は即ち其の光を知る。

嗚呼「永劫の眞理」「誠實の愛」「愛すべき永劫」爾は即ち吾が神なり。我晝も夜も爾に嘆く、我が始て爾を知りし曉、爾我を捕へたまへり。是故に我未だ之を見るに適せざりしとはいへ、吾が內に見らるべき者のあるを見得たりき。爾吾が薄弱なる視線を反射し、其の光耀を以て我を瞑

眩せしめたまへり、我愛と恐懼を以て戰き、恰も他國他鄉に在りて、天より我に喚ぶ聲を聞しかの如く感せり、曰く「我は成人の食物なり、人となれ、然らば汝は我を食するを得ん、汝我を汝の實質に化すること、其の肉の食物の如くするを得ず、反つて汝我に化せらるべし」と。爾人の不義を譴責し、吾が靈魂をして蜘蛛の網の如く消散せしむることを悟れり、其時我曰く、「然らば眞理は非有なるか、蓋は眞理は有限無限の空間の中に流通せるに非ざるが故なり」と。而るに爾遙に喚びたまふ、「否然らず、我は在りて在る者なり」と。我之を心が聞きし如くに聞き、疑を容るべき餘地なかりき。爾の在らざることを念はんより、己の存在を疑はん方易かりき。蓋は神の在すこと、造られたる者に由りて明に視るべく、悟るべければなり。

第十一章

萬物は如何に有るか如何に有らざるか。

我爾の下なる萬物を見、其の全然實在なるにも非ず、又全然幻影なるにも非ず、其の爾より出で來りし限に於ては實在にして、其の爾と同じからざる限に於ては幻影なるを見き。蓋は獨變化なくして存する者のみ眞實なる實在なるが故なり。是故に神に賴りて固く自ら保つは我に善し、蓋は若我彼に住まらずんば、已に住まること能はざればなり。然れども彼自在にして一切を新ならしむ、爾は主たる吾が神なり、蓋は吾が善は爾に在つては何物にも有らざればなり。

第十二章

實在する者は善なり。

大凡腐敗する物も善なること我に於て明亮になれり。彼等は其の若最上善ならば、又其の善なるに非れば、腐敗せらるること能はず、蓋は若其の最上善ならば固より腐敗すること無かるべく、又若毫も善ならずんば、其の中に何等腐敗を受くる所無かるべし。蓋は腐敗の腐敗し得るは、獨善を耗してのみ腐敗し得るなり。是故に腐敗が一の腐敗をも加へざる乎。然らざれば一切腐敗すべき物が己の善を侵蝕せらるゝか、二者何れか其の一ならざるべからず。前者は無論不可能なり、後者は極めて可能の事なり。然れども若彼等萬物にして、一切の善を取除かれたらんには、其存在を失ふべし。蓋は若其の猶存在して更に腐敗する所無くんば、彼等は爾來腐敗せずして存する故に、其物は前より上

善なるべければなり。

是故に一切善を失ひて上善たるを得んと主張するが如き奇說怪論あること無し、若其の然く一切善を失はゞ、固より存在を失ふべし。是故に其の存在する間は、其の物は善なり。是故に一切存在する所の者は善なり。是故に我が其の起原を尋ねつゝある所の惡は實體にあらず、若其の實體なりしならば、其の必ず善なるべければなり。蓋は萬物は腐敗すべからざる實體なるか、然らざれば腐敗すべき實體、即ち其の善なるが故に腐敗を受くる所の物なるか、此の兩者を出でざればなり。是故に我爾の造りし者は善なること、爾の造らざりし者には何等實體あらざることを明に察るを得たり。而して爾は萬物を平同に造らざりし故に、萬物各自に相當に善なり。一切を總括すれば極めて善なり、蓋は吾人の神は極めて善く一切萬物を造りし故なり。

第十三章

一切の所造物は神を讃美す。

爾には何等惡の如き物有ること無し、一全體と見る爾の創造物にすらも有ること無し、蓋は爾の其の上に課したる律法を破り、之を毀ち得る物とては、惡の外には無ければなり。精言すれば所造物の中に或る事物あり、其の事物は所造物の或る部分に應當せざるが故に惡と稱らるれども、此の同一事物が其の他の部分に應當せるが故に之に善なり。然れば其の事物は自身に於て善なり、而して其の相互に對して應當せざる所の其の事物の一切も、地と呼ばれて、己と同質の風あり雲ある空を有する下半の所造物に應當す。然らば則ち此の感覺すべき世界の外に、何等存せざる所の事物〔即ち惡〕を思料せんとするは如何なる痴事なる乎、蓋は我獨此の世界のみを見れば、無論他の上善の世界を待望せ

ざるを得ざるも、尙且我は獨此の世界の爲に爾を美めざるを得ざればなり。蓋は爾の地に於て美められたまはんが爲に、龍も亦爾を稱へ、凡の淵も、火も、霰も、雪も、氷も、爾の言を充せる風も、又諸の山、諸の丘、諸の果を結ぶ樹木、諸の香栢、獸畜、昆蟲、羽毛ある鳥、地の諸王、諸民、地の諸主、百官、壯士、處女、老人小兒も齊く爾の名を美むればなり。而して猶天に在りては、一切の天使、高に在ます爾を讃め、一切の爾の衆群、日や月や、一切の星、一切の光、諸天の天と、天の上に在る所の水と、爾の聖名を美め稱ふるを見れば、我は曰ふ、我復た他の上善の世界を求めずと、蓋は吾が思想、一切萬物を按排し、健全なる判斷を以て考慮し、上界なる萬物は下界なる萬物よりも優れりとはいへ、尙且一切總括したる所造物は、獨り上界なる萬物よりも優りし故なり。

第十四章

健全なる心は神の創造物の中に惡なる一物を發見せず。

爾の創造物の何等かの部分に對して過失を發見する所の輩に、健康なる精神あること無し。猶我が爾の諸の造作に於て過失を發見したりし時に當つて、健康我が內に在らざりしが如し。而して吾が靈魂敢て神に向ひて過失を探討せざりし故に、其の發見したる過失を爾の手工なることを峻拒したり。是を以て吾が靈魂は二元即ち二個實體の觀念の中に彷徨し、何等安息を得ること能はず、徒に奇怪なる言語を放ち自ら滿足じき。然れども幸に其の誤謬を免れし吾が靈魂は、更に己の爲に神を無限の空間に延長し、之を爾なりと考へ、之を其の心に占領して、我ながら再び爾の目に憎ましき己の偶像の宮となれり。然れど爾は我自ら知らずといへ、吾が頭腦を和げ、吾が目を瞑ぢて虛妄を見ざらしめたまへり。是に於て我が狂愚は自ら己みて眠に就きぬ。我終に寤めて爾を仰ぎ、其の無限を覩たり。然も我が豫想せしが如き尋常一樣の方法を以てせしに非ざりき、而して其の見る所は肉の啓導に由らざりし物なり。

第十五章

眞理と虛妄と、如何にして創造物の中に在るか。

我他の事物を覩て、大凡有限なる物が、爾の內なる其の存在を、爾に歸することを見たり、然れども此れ爾の內に在るに非ず、空間の中に在り、唯爾の之を保つが故に萬物皆爾の眞理の中に在るを見たり、又萬物は其の存在する限に於て眞實なり、虛僞は唯此の有らざる物〔虛僞其物〕を考ふる者の頭腦の中に存せる外、何等在る所なきことを見たり、我又萬物

は各其の位置に對し、其の時間に對して、相當なる關係を有すること、惟獨永劫にて在ます爾は、無量の時代の經過するを待つて始めて作動したまひしに非ざるを見たり、蓋は何等の時間、過去の其も、未來の其も、爾の作動と常住とに由るに非ざれば去來するを得ざればなり。

第十六章

一切の所造物は其の一切に應當する無きも猶善なるを失はず。

我又甘美なる食餌も、疾める口腭には刑罪となり、又健全なる眼光に愛すべき光線も、疚き眼睛には憎ましき物となるも怪しむに足らざることを感じ且悟れり。邪なる者は爾の公義に對して缺點を看出すこと毒蛇、蛆蟲に對するが如し。然れども此等は善なり、唯爾の創造物の中下等に屬せりと云ふのみ、邪なる者も其の爾に異なるの甚しきほど、其の正當なる位置も亦下等に屬す、尙且其の爾に等くなるに臨ひて高等に屬す。是に於て我は邪曲とは何物ぞと問ひ、我其の何等實體なる物に非ず、唯至上實體なる爾に背きて下等なる事物を欲望し、其の內在の寶藏を拋ちて、自ら放浪を誇る所の意志の頑硬是なるを發見しぬ。

第十七章

人を控制して神の智識に至らざらしめんとするは何物なる乎。

獨怪しむ、我今自ら爾を愛し、復爾の代りに幻影を愛せるに非ざる事を看出だせることを。我靜坐して吾が神を享樂すること能はず、爾の美を奪はれて爾の所に掃き上げられ、再び己の重量の爲に爾の許より斷ち去られ、苦吟しつゝ此感覺すべき世界に落下し來れり。其の重量とは肉慾の習慣是なりき、然れども爾の記憶我が衷に在りき、我又此の記

憶の中に我が攀ぢ附くべき其人ありしことを毫末も疑はざりき。唯我が疑ひし所は我が猶彼に攀ぢ附くを得るや否やに在りき、蓋は今腐敗すべき肉體靈魂を壓仆し、地上の幕舍、萬物を冥想する所の心を鎭壓するが故なり。最も確實なる事は是なり、爾の見るべからざる事物は明白に世界の組織に由りて見るべく、爾の永劫の威能と其の神性とすら、所造物に由りて曉るを得べき事なりとす。

我如何して天上、地、の物體の美を評り得べき乎、如何なる定木の吾が手に備へられて我が此の變轉すべき庶物を正當に判斷し、是は斯くあるべく彼は斯くあるべからずと曰ふを得る乎を問ひしに當り、——如何して我は此の如き方法を以て判斷する事を得べき乎を問ひしに當り、我が己の變轉已む無き智識を超絕して、不變、永劫の眞理あるを看破し得たることは明亮なりとす。斯て我一歩一歩向上して、肉體より、五官に由りて知覺するところの靈魂に、靈魂より、其の內面の機能に進む、五

官は之に外界の事實を傳達す、此の五官は獸類にも屬す、又內面の機能より更に推知の能力に啓導せられぬ。五官を經由して受けたる智識は、此の推理の能力に交附せらる。

吾が內なる此の能力の、其自身變化常なきを發見せしに當り、其自身己を己の智性に進ましめ、其の思想を經驗より引去り、己を矛盾せる五官の對象群より抽出せり。是れ此の推理力が不變は變化より優れることと必ず疑あるべからずと叫破せし時、又其の如何して不變なる者を知るに至りしを借問せしとき、其の己を洗淨したりし彼の內なる光の、果して何物なりしやを發見することの有らん爲なり。此の不變なる物は推理力が此の方又彼の方を以て知りたるべき者なり。然らざれば其の然かく安全に不變なる物を取りて變化する物を棄つるを得ざればなり。是に於て推理力は一瞥の光を以て實在の異象に達せり。我是に於て終に爾の見るべからざる事物の、造られし物に由りて領悟すべ

きを觀破したり。然れども我吾が瞻望を維持し得ず、吾が荏弱即時に復歸し、己の平凡なる經驗に追ひ還され、此の經驗の中に我唯一片の愛すべき記憶を留め、我が未だ食ふことを得ざりし食物の香氣を養ふ外あること無かりき。

第十八章

救拯に達する惟一の「途」なる基督。

是に於て我爾を享樂し得べき勇氣を獲るの途を考案したり。且又我自ら神と人との中間なる仲保者、萬物の上に在り永久神に祝せられたる基督耶蘇なる人、我を召して我は途なり眞理なり生命なり(約十四〇六)と曰ひし者を抱擁せしまでは、何等の道をも發見し得ざりき。彼は己を肉に雜へし者にして、我が猶未だ受くる能はざりし所の食物なり

き、蓋は爾の一切創造の智慧自身が、我等赤子の乳とならんが爲に「言」肉體となりし故なり。蓋は我猶未だ謙りて、此の謙りたる主基督を捉へず、又猶未だ彼の荏弱の我に教へし其の意味を知らざりし故なり。蓋(けだし)爾の「言」なる「永久の眞理」は、高く爾の創造の高等なる部分の上に崇められて、其の信者を己に向はせて之を昂め、其の下等なる部分に於ては己の爲に吾人の賤しき土塊の住居を造れり。是は彼斯くして彼其の信者たらしめんと欲する者を各其の自個より倒して之を己に克服し、其の傲慢を制へ、其の愛心を擧げん爲なり、其の自負に由りて遠く徘徊することと無く、反りて其の目前に吾人の如く罪の衣を共分して弱くせられし神(耶蘇)を見て、弱くせられんが爲、而して後又彼等自ら疲れて身を彼の上に投じ、彼の興るに由りて立てられん爲なり。

第十九章

彼キリストの權現を何と考へしか。

然れども我は別樣なる考案を有しき、我吾が主キリストを單に大智の人何等比擬すべき者無き人と思惟しき。其の不朽を獲んために一切世間的事物を賤むの摸範を吾人に顯す爲に、一處女より奇蹟的に生誕し、以て吾人に對する彼の聖なる看護を示せる故に、我は特に敎師として、最高權威に彼の價せることを主張せり。然れども「言肉體となりき」といへる語が、如何に神聖なる意味を有せしか、我之を揣摩する能はざりき、我唯彼に就て錄されし所、(其の飲み且食ひ、眠り且覺め、喜び又悲み、考へ又論ずること)よりして、其の肉が、人の靈、人の心無くしては爾の「言」と合體せざりしことを知りしのみ。是は凡爾の「言」の不變なるを知る者の皆知る所、我又此時に及んで能する限之を知り、嘗て之を疑はざり

き。蓋は一時に於て意志の作用に由りて足を動し、他時に於ては之れを動さず、一時に於ては一の情緒を感じ、他時に於ては之を感せず、一時に於ては言語の符號を以て意中を語り、他に於ては之を語らざること、——是の如きは變易すべき靈魂と心との正當なる徵號なりとすれば なり。而して若し如上の事實にして聖書に由りて妄に彼に歸せられしならば、一切聖書中の眞理は、之を信ずるは甚だ危險にして、其の人類の救拯たるべき信仰は、聖書の中に殘ること無からん。

是故に錄されたる所は眞なるが故に、我は耶蘇基督に於て、完全なる人、單に人の身體又人の心なき靈魂と身體とのみならず、更に靈魂と心と身體とを認識し、而し此人を一切の人に優りたる者と見たり。其の「眞理の人格」たるが故に非ず、天賦の智慧に歸すべき彼の人性の、秀美又完全なるに依つてなりき。之に反してアリピアスは正統信者の信仰を評して謂へらく、彼等の敎ふる所に據れば、耶蘇基督の中には神性と肉

體の外、人の靈魂と人の心は有らざるやう、神肉體を衣たりと曰へりと。是故に彼は漸徐に基督教の眞信に導かれ來たれり。蓋は彼耶蘇基督に就て錄されたる所を必ずや活ける、合理的性質を含蓄せるを悟れりと感せし故なり。然れども其後彼は己の謂はゆる正統信仰が實はアポリナリス派(一)の異端の誤謬なりしことを發見し、是に由りて彼は喜んで正統信仰に服從したり。我自身に在つては、我は告白せざるべからず、「言肉體となりし」と云ふ一句の解釋に於て、正統者の眞理とフホチニア派の無稽との間に如何なる差別あるかを學びしは猶後年の事なりき。實や異說を拒絕するは、爾の敎會の意味と健全なる敎理とを愈明にする所以なりけり、蓋は稱められたる者の、弱き者の中に顯はれんが爲、異端起らざるを得ざればなり。

(一)譯註、アポリナリスはラオデキアの長老にして、舊約を古典体に、新約をプラトーの問答體に改造せんと企し人、(紀元四世紀)。

第二十章

プラトー者の書籍が彼の智解を探むる同時に愈其の驕慢心を加ふ。

我此等プラトー者の書籍の研窮に由りて、無形の眞理を探求すべく敎へられ、爾の見るべからざる事物が、所造物に繰りて悟られしを見たり。而て一たび投還へされしとはいへども、吾が靈魂の痴鈍が、從來仰ぎ望むことを許さゞりし所の事物を感ずるに至りき。我爾の在すこと又爾は有限無限の空間を貫いて散布せずとも、其の無限なることをば疑はざりき。又爾は部分の差別なく、運動なく、恒に平同なるが故に、爾の眞誠に在すことを疑はず、又萬物は爾より引き出されたることは、其の存在の事實に由りて證明せられて、拒絕すべからざることを疑はざりき。我之を悟りしかども、尙且爾を享樂するには我は餘りに弱かりき。

我智者の如く饒舌したり、然れども吾人の救主基督に於て爾の道を發見するに非れば、我が眞實と判斷せし事物は悲哀に終るらしかりき。蓋は我人をして己を智者と思はしむべく始め、吾に於て刑罰なりし事物を深く飲みこみ、我が啼くべかりし所に智識を以て面を膨らしぬ。謙遜の土臺なる基督の上に建てし所の慈悲安に在り乎、又此等の書籍が我に慈悲を敎へたりや、我信ず我が爾の聖書を研窮するに先ちて、此等の書籍に沉潛せしは爾の聖意なりしことを。是は其の書籍の吾が心地に印せし印象の何なりしやを、我が忘るゝこと無からん爲、而して後日我が爾の聖書に由りて敎へられ、吾が瘡痍の爾の力ある手指に由りて痊されしとき、傲慢と懺悔との間の區別、又其の旅行の目的を見て、其の旅行せる道路を見ざる者と、幸福なる國即ち幻影ならざる實際の鄕家に導くところの道路を見る者と、の區別を我が明亮に認むべき爲なり。蓋は若我始爾の聖書に依りて信仰を型くられ、其の伴侶に緣り

て爾の甘美を感じ、而して後プラトー者の著述に栖まらば、此等の著述は恐くは敬虔の土臺より我を解放したらん。然らずして我が救拯の井より汲みし信仰を固執したりとせんも、我之を獨プラトー主義より握り得たる者と想ふに至らんも又知るべからざりしなり。

第二十一章

彼が聖書に於て發見せし物、プラトー主義に發見せざりし物。

是に於て我は最大熱心を以て爾の聖靈の莊嚴なる書籍に、特に使徒パウロの上に執着し、初は往々彼の書翰に自吾牟盾あるかを意ひ、其の敎訓の意味の、律法、預言者の立證と相合はざる所あるかを思ひぬ。然れども今や此等一切の疑團は氷解し畢りぬ。我此の淸新なる言語の、唯一面を有せしを見て、喜と懼を以て之を學びぬ。我斯く學び起して、我

が舊約に讀みし眞理は、其の如何なるにも拘らず、悉く此のパウロの書翰の中に於て爾の恩寵の高潮と結合せられしを發見したり。是故に苟も見るを得る所の人〔人類〕は、獨其の見得る物のみならず、更に其の見得る其の目を賚はざりしかの如く誇るべからず、――蓋は彼何の賚はざる所あり乎。是故に彼は恒に平同に在ます爾を捉へん爲に、獨見るべく勸めらるゝのみならず、又淨めらるべく勸めらる。是故に遠く見るを得ざる人も、神を得、神を見、神を捉ふべく己を導く道に上るを得べし。蓋は人は內なる人に從へば神の律法を樂めども、其の肢體の中に在りて、其の心の法と鬪ひ、彼を擄にして其の肢體の中に在る罪の法に服はする所の他の法を以て、將た何を爲さんとする乎。主よ唯爾は義くします、然れど吾人は罪を犯し不義を行ひ、惡慝を肆にせり。吾人は正に彼の上古の罪人なる死と云ふ主に授されたり。彼吾人を勸誘し、其の由て以て神の眞理に背く所の其の意志に、吾人の意志を同化せし

めたるが故なり。

困窮せる人當に何を爲すべき乎。吾人の主耶蘇基督に由る爾の恩寵の外、誰か此の死の體より我を救ふ者ぞ。爾彼を爾自身と均く永劫なる者に生み、爾の道の初として彼を造りたまへり。此の世の王は彼の身に死に當る事を發見せざりき。尙且彼は之を殺し、是を以て吾人に反對せし所の手にて錄せし書を塗抹せり。プラトー者の載籍は之に就て語る所無し、其の一頁も此の宗敎の相貌を刻むことなく、懺悔の涙、煩悶の靈、爾の好みたまふ供物なる碎けたる悔いし心、民人の救拯、新郎、聖京、聖靈の熱心、吾人の救贖の盃等、此等の事物を發見する無し。茲には何人も是の如く歌ふ者なし、曰く、「吾が靈魂は默して唯神を待つ、吾が救贖は神より出づ、神こそは吾が磐、吾が救、吾が高櫓にしあれば、我いたくは動かされじ」と〔詩六十二〇一、二〕。

〔凡て疲れたる者は我に來れ〕と喚ぶ所の彼〔基督〕に、人誰も耳を傾くる者

なし。彼等は彼の柔和にして心謙りたる者なるが故に、彼に就て聽くことを恥づ。蓋は爾は此等の事物を知者達者に隱して、之を赤子等に顯したまへばなり。平安の道を瞰下しながら、尙且之に達するの徑を看出さゝる或る高木の巔より、人跡なき曠野、獅子、猛蛇を王とせる脫走群の伏兵に圍まれたる曠野に由つて、其の道に達せんと徒に努力するも一事なり。上帝の注意に由りて敷かれし公道、何等の天軍の離反者も、此の公道を苦痛として避けし故に、旅客を刷奪するの虞なき公道に由りて、是(平安の道)に達せんとするも亦一事なり。我が纔に使徒パウロを讀み起しゝとき、此等の思想怪しく吾が衷に躍り、爾の工を思念して慄き懼れぬ。

第八篇

彼茲に其の生涯の最も著名なる時期即ち其の三十二歲に達せり。此年や彼シムプリシアナスよりビクトリナスの改心譚を聞き、ポンチシアナスよりアントニーの一代記を聞き、肉と靈との猛烈なる苦鬪を經て後、終に天よりの聲に聽從ひて眼を彼使徒の聖書に曝し、其の全心を倍善の道に轉じ、竟に全く神に歸依するに至れり。

第一章

彼心を決してシムプリシアナスに即きて其の勸告を受けんとす。

嗚呼吾が神我をして爾の我に注ぎし慈悲を、感謝を以て之を記憶し、之を告白せしめたまへ。吾が骨をして爾の愛に浴して曰はしめよ、「爾に等く在します主、爾は吾が骨を打ち碎きたまへり、我爾に感謝の供物を獻げん」と(詩三五〇十二―詩百十六〇十六)。爾は如何に之を碎きたまひしか、我之を宣ぶべし、然らば大凡爾を拜する者之を聞て曰ふべし、「福なるかな天地の主、爾の名は大にして奇し」と。爾の言吾が心に執着し、我

アウガスチン懺悔錄

は爾の爲に繞り圍まれたり。我今鏡に向ひて見る如く見る所朦朧なれども、爾の永生に就て我は確信する所ありき。我は一個不朽の實體あること、其の實體が其他の一切の實體の源因なることに就ては、一切の疑點を拂拭し、爾に就て更に確實なる證據を求めず、反りて爾に於て更に確實なる安心を求めぬ。吾が現世的生涯に就て曰へば、吾が計畫する所は悉く齟齬し、吾が心は猶舊き麹酵よりして淨められざるべからず、「道」なる救主自身は好く我を喜ばしめぬ、然れども我猶未だ窄き路よりして進むを忌みにき。

爾我に、往てシムプリシアナスに即くべきことを吾が心に示し、吾が目亦之を善と視たり。彼は吾が目に爾の忠僕なるべく見え、爾の恩寵彼の上に顯はれぬ。我亦是く聞きぬ、彼其の青春より至誠爾に仕ふる爲に生きたりしことを。彼今は既に老いたり。然も其の爾の道に隨順すと云ふ善良なる目的の爲に多年を費したりしかば、我は思ひき、彼は

諸の經驗を得、諸の見聞を有したるべしと。彼は實際有し、なりき。我は茲に吾が精神の動搖を彼に告んと心を決めぬ。彼は其の經驗よりして、己其の道に迷へりと感せし者に、如何か是れ攀るべき正路なるやを示し得べしと望んでなりき、蓋は我は彼の教會の充溢せるにも拘らず、一人は彼方に向ひ一人は此方に向ひつゝ、「人各其の路を教へられて」あるを見し故なり。然れども我今浮世に於て生き居る吾が生活を以て滿足すること能はざりき。是は今我に重負となれりき。吾が野心の、名聞富有の希望を以て煽動すること、復た昔日の如くならざりし乎、繫縛は吾が堪へ得る所に非りき。蓋は今我が愛する所の爾の甘美、爾の家の善美に比へて、既往の餌食は復た我を誘ふに足らざりし故なり。然れども我今猶一婦人の愛に勤く羈かれたり。將彼の使徒も吾が娶ることを禁ぜざりき。其の設我に優れる道を示し人皆彼に倣はれることを熱心に願へりきとはいへ。

然れども我甚だ弱かりき、我は容易なる道を擇びぬ。而も惟此の一事の故を以て、吾が全生涯は輕忽なる姑息の生涯となり、無益なる憂悶を以て之を銷磨し了れりき。諸の困苦の際に於て、我吾が手と足とを繫りし所の有妻生活の要求に從ふの已むを得ざるに遭ひし故なり。我は「眞理」の口よりして、天國の爲に己を寺人となせし寺人ありしことを聞きぬ。然れども彼又曰く、「此言を納くるを得る者は之を納くべし」と(太十九〇十二)、實や凡神の事を知らざるもの、又見ゆる所の善物に由りて神の在すことを見出すを得ざる者は愚なる哉。然れども我復た其の痴愚の中に安せざりき、我は其以上に攀ぢ登れり。證を立つる萬物の聲に由りて吾が創造者なる爾を發見し、又爾と與に在す爾の「言」なる神、即ち爾と一にして又聖靈と一なる神、爾の之に由りて萬物を造りし其の者を發見したりき。

茲に又他の一種の不虔者あり、彼等は神を知りながら神とし崇めず、又

謝せざるなり。我又此輩の中に陷れりき。然れども爾の右の手我を捉へ我を其の同輩の中より召び出し、我を我が寤むべき所に眞きたまひき、蓋は爾人に告げて「神を恐るゝは知慧なり」(箴三〇七)と曰ひ、「又爾の目にて智とする勿れ」蓋は「自ら智なりと稱する者は愚となるべけれなり」(羅一〇二二)と曰ひたまへばなり。嗚呼我既に善き眞珠を看出せり、我吾が凡の所有を賣て之を買ふべき當なりき、尙且吾が心を決する能はざりき。

第二章

シムリシアナス修辭家并クトリナスの改悟を語る。

是に於て我は當時の監督アムブロースの靈の父にして、アムブロースの眞誠に父とし愛する所のシムブリシアナスを其家に訪ひ、彼に吾が

一切の漂泊の昏惑を語りぬ。而も我之に向ひて羅馬の修辞學の教授ポクトリナスの事を述べ、彼は我が聞きし所に隨へば基督信者として死し者、我亦彼が羅甸語に飜譯したる若干のプラトー主義の書籍を讀みしことを述ぶるや、シムプリシアナス手を拍て其他の哲學者の著述と遭遇せざりし吾が好運を賀したり。彼謂ふ、此等は世の小學の如き虚妄と欺罔とを以て塡められしもの、之に反してプラトー主義の中には、神と其の「言」と隨處に暗示せられたり。彼は次で基督の謙遜に倣ふべく我を奬勵せんが爲に、其の羅馬に於て稔知したりしポクトリナスの就て我に語りき。我彼に就て彼より聞き得たりし所を今茲に覆說するを禁ずること能はざるなり。

蓋は最も該博にして一切の科學に熟達したる此の老人、然く多數の哲學上の著述を讀み、且評し且說明したりし彼、然かく多數高名なる議官の家庭の師たりし彼、嘗て高貴なる官職に在りて、此の代の市民が卓越

とし考ふる所の顯著なる功業の爲に、羅馬の公會堂に其の肖像を建つるに價したりし彼、晩年に至るまで偶像の崇拜者、不虔なる禮典の享饌者なりし彼、――此の禮典は當時羅馬の貴族全體を動し、其の人民にすら、謂はふる「吠ゆるアヌビス(一)其他各種の異形の諸神」の動物的同屬に對する恐怖を感せしむる物なりき、此等諸神は嘗てチプチユン、ゼナス、ミチルバに對つて其の劒を擧げたりしが、今は之が克勝者たる羅馬を飾る物となり、此の老偉人ポクトリナスの長く其の雷霆の威辯を以て保護したりし物なり、――今此の老偉人なる彼が如何にして爾の受寵者の子、爾の沒身盤の赤兒となり、謙遜の軛に其の頸を垂れ、十字架の非難に向ひて其の額を硬くするを恥ぢざるに至りしかを、吾人一たび考察するとき、是は確實に爾に告白せざる當からざる所の爾の思寵の光榮なる證據なりとせざるを得ざるなり。

(一)譯註、アヌビスは犬首人身を有せる埃及の神なり。

嗚呼主よ、誰か天を垂れて降りし乎、誰か諸の山を打ちて之に煙を起さしめし乎、爾如何にして爾の道を其の胸に通せし乎、シムプリシアナスが曰ひし如く、彼は居常聖書を讀み、有らゆる基督教文學を大なる勤勉を以て檢閲せりき。彼恒にシムプリシアナスに、公に於てせず私の安然に於て謂つて曰く、「爾當に知るべし、我は既に基督信者なり」と。シムプリアナス答へて曰く、我之を信せざるなり、又我爾を教會の中に見るまでは爾を基督信者の中に數へざるなり」と。ポクトリナス笑つて答ふらく、「果して然らば是れ壁、基督信者を造るなり」と。彼屢其の既に基督信者なることを斷言し、シムプリシアナス之に同一の答を與へ、同時に壁の諧謔反覆せられぬ。彼其の友人を害ふことを恐れたり、彼等は高慢なる鬼神拜者なれば、恰も主の未だ折りたまはざりしレバノン山の香柏の頂上よりせるが如く、敵愾の雪崩が、彼等各自のバビロニア的高慢の絶頂よりして、彼の頭上に落下し來らんと想へりき。

然れども彼は讀書と反省に由りて勇氣を得たり。彼は若人の前に基督を知ると曰ふことを恐れたらんには、己亦聖き使者等の前に基督に由りて爾を知らずと曰はれんことを恐れたり。彼は若爾の言の謙遜の禮典を受くるを恥ぢて、此等高慢なる鬼神を不敬にも猶崇拜するを恥ぢざらんには、大なる犯罪を以て罪せらるべしと云ふことを見たり。彼は既に虛妄に就て嫌厭を生じ、眞理の爲には恥辱を感じぬ。是に於てシムプリアナスが我に語りし如く、彼俄然不意に來りてシムプリアナスに謂つて曰く、「請ふ我を教會に伴ひ往け、我基督信者とならんと欲す」と。シムプリシアナス喜極り、彼を教會に伴ひ往けり、彼先づ教訓の禮典を受け、後久からずして其名を以て其の更生の沒式を受くるを許し、羅馬を驚かし、教會を喜ばしめたり。高慢者之を見て激昂し、其の齒を切みつゝ消え去れり。然れども主たる神其の新なる僕の望なりき。彼復た虛妄と狂妄とを省みざりき。

終に公然其の信仰を告白すべきの時來れり、羅馬に於て將に爾の恩寵に入らんとする人々の信仰告白を爲すや、信者の注視する所の平臺の上に於て、定式の言辭を熟心に反覆することを以てす。其時、シムプリシアナスの語る所に據れば、長老等「ポクトリナス」に與ふるに、其告白を私にすべき許可を以てせりき。是は故ありて斯く辛酸なる拷問を避けんと欲する人の場合に在りて、除外例にあらざればなり。然れども彼は熟慮の末、聖會の面前に其の救拯を告白せんことを擇みたり。蓋は彼が教授したりし修辭學には何等の救拯あること無きに、尙且彼は公然之を唱道したればなり。然らば則ち彼其の言語を狂者の隊伍の前に發つことを退避せざりしに當つて、如何ぞ爾の「言」を爾の羊の群の前に名ることを退避すべけん乎。

是故に彼其の告白を爲さんとして平臺の上に登るや、大凡彼を識る所の者皆其の名を唱へて歡呼したり。誰か彼を知らざりし者あらんや。

是故に「ポクトリナス、ポクトリナス」といへる耳語、此の歡びあへる聚會の周圍に漏れ聞えぬ。聚會彼を認めし時、歡呼の響卒然なりし如く、彼に聞んとせる、聚會の傾耳の沉默も卒然なりき。彼今大膽なる自信を以て眞の信の告白を反覆し、人皆彼を其の胸に懷きぬ、然り愛と歡喜の腕を以て彼をば己の胸に懷きぬ。

第三章

神と其の天使と罪人の悔改を一倍歡びたまふ所以。

嗚呼善なる神、吾人が危ふき死地に於て絶望し、若くは之より助け出されたる靈魂の救拯を喜ぶこと、嘗て希望を失はず、嘗て斯の如き非常の危險に濱せざる靈魂に勝るあるものは何が故ぞ。是れ天の慈父にて在ます爾が、悔改めたる一人の者を喜びたまふこと、悔改むるに及ばざ

る九十九の義人に勝るあるが爲なり。是故に吾人は如何に一匹の迷べる羊が衆の天使の歡喜の間に、牧者の肩に擔はれ歸るか、如何に失はれたる一片の金が、藏貨の中に回復せられし時、隣人來りて之を得たる婦人と與に喜ぶかを聞くに當り、大なる歡喜を以て之を聽く。吾人は爾の家に於て死して復生き、失はれて再び得られし彼の末子の譚話を聞きては、爾の家の宴會の歡樂、吾人の目より涙を墜さしむ。蓋は聖なる慈悲に由りて聖なる所の爾の天使の爲、吾人の爲に喜ぶ者は眞に爾に在ませばなり。爾は恒に平同なり。蓋は常なく、變りなくんばあらざる所の萬物を、爾は變りなく知しめすが故なり。然らば則ち吾人の靈が其の愛する者の失はれたるを再び發見し回復したるを喜ぶこと、反りて之を不斷に所有せるに優るものは何が故か。何となれば萬物之に證を爲し、萬物一口に出るが如く「正に然り」と叫べばなり。大將は其の勝利に由りて凱旋す、戰鬪無ければ勝利ある無し。戰鬪愈

荒ましければ、凱旋の喜愈大なり。颶風興つて舟夫を振盪し、難破を威赫し、人皆死の面前に於て面を青くす。忽ち天晴れ、海平げば、其の狂喜の高きこと恰も其の恐怖の深かりしが如し。愛する者正に病み、其の脈搏危篤を預言し、之が回復を待望する者は皆同情に由りて心を傷ましむ。既にして有望なる轉機來る、尙且患者は其の前日の元氣を以て歩むこと能はず、然も忽ち歡天喜地あり、其の嘗て健全に歩みし間、見ること能はざりし歡喜なり。

人生の快樂すら之を獲るに苦痛を以てす、其の苦痛は卒然、不意に來るに非ず、考慮して招きし物なり。先づ饑渴の苦痛あらざるよりは、飲食の快あること無し。痛飲者は苦熱を生せんために鹹味ある食餌を喰す、飲料之を雜ふれば即ち快樂を與ふ。新婦の直ちに結婚に由りて許約者に嫁與されざるは通習なり。是れ新郎が、嘆息以て久しき契約の時間を待望するを要せざりし賜物を輕視すること無からん爲なり。

卑劣、詛ふべき快樂に於て然り、普通許認せられたる、快樂に於て亦然り、最も純潔にして最も愛すべき友情に於ても亦然り。死して復生き、失はれて又得られたる所の人に於ても亦然り。大なる快樂の大なる苦痛に從ふこと、往く處として然らざるは無し。

嗚呼吾が主、是れ果して何を意味する乎、蓋は爾は自ら爾の永劫の歡喜なればなり。將た又爾の身邊に恒久に爾を樂む者在り乎、人類の創造の中に匱乏と滿足、諍訌と愛の交迭之ある者は抑も何ぞや。是れ吾人の法則なる乎、天の高より地の深に至り、時の始より其の終に至るまで、天使より昆蟲に至るまで、運動の發端より其の最後に至るまで、爾其の正當の位置と其の正當の時期とを、一切善と視たまふ物に、爾の一切の正しき工に賦與したまふに當り、爾の吾人に賦與したまふ所此に留り、更に之より上らざる乎。嗚呼爾は高度に於て如何に高く、深度に於て如何に深き乎。爾嘗て吾人を見棄てたまはず、尙且爾に返ること如何

に難きか、主來りて働きたまへ、吾人を興して勵ましたまへ。吾人を熱して向上せしめよ。花の如く薫り、蜜の如く甘く在して、吾人に愛することゝ走ることゝを敎へたまへ。

第四章

吾人は何が故に偉人の改心の爲に一倍喜ぶべしと爲す乎。

ポクトリナスの陷りしより一層深き闇黑の坑より出でゝ、爾に返り爾に近づき、神の榮光の發輝、即ち之を受けし者は爾よりして爾の子となるべき權威を受くべき其の物を受くる多數の人實に之あるに非ず乎。然れども若此輩にして民衆に知らるゝこと少ければ、彼等を知る者といへども彼等の爲に喜ぶこと少し。蓋は歡喜は之を分つ者多ければ、其の互に相煖め、互に他の火を相取るが故に、各自の歡喜や愈豐富なる

を致す。又其人多くに知らるれば、其の救拯に人を誘ふことも亦多く、其の導く所の道に從ふ者亦多し。是故に彼等に先ちて其道に入りし輩さへも、大に彼等の爲に喜ぶ。蓋は此の人々は獨彼等の爲にのみ喜ぶに非ざるが故なり。蓋爾の幕舍に在りては富者貧者に先つて納けられ、貴人賤民のに先つて呼ばるゝごときこと有ること無し、蓋は爾は强者を愧しめんとて世の弱者を選び、有る所の者を滅ぼさんとて世の賤者藐視らるゝ者即ち無が如き者を選びたまへればなり」。(哥一〇二七、二八)

然れども爾が其の口を藉りて此等の言を發したまひし「爾の使徒」の最微き者(パウロ)すらも、——方伯パウロが己の傲慢の、該說敎者の劒の爲に碎かれ、爾の基督の輕き軛の下に詭づき、其の大王(基督)の僕となりしとき、——彼すらも此の光榮なる勝利を紀念すべく、其のサウロの名に代ふるにパウロを以てすべく擇みき。蓋は敵は其の一倍固く捉へ、而

して之に由りて一倍多くを捉へたる者の爲に愈痛く打たるゝ故なり。其人は其の位置の故に一倍多く矜誇を有し、其勢力の故に由りて、一倍多く人を捉へたり。是故に惡魔が難攻不落の城壁として保ちし所のギクトリナスの心と、惡魔が之を以て然く多數を殺したりし其の鋭利なる武器なりしギクトリナスの舌とを、世が貴重したるほどに、然ほどに爾の子輩の歡喜も亦高かるべきなり。蓋は吾人の王が此の勇者を縛りて其家財を彼より奪ひて之を淨め、之を以て爾の名を美むるに適せしめ、之を以て諸の善き工の於て爾に盡すべからしむるを彼等は見たればなり。

第五章

アウガスチンの改心を妨碍する所の物は何ぞや。

爾の僕シムプリシアナスが我に此のポクトリナスの說話を語りしや、我は彼の實例に倣ふに熱心なりき。是れ彼の作興せんと希望せし所の結果なりき。然れども彼語を進めてジュリアン帝の御宇に於て、基督信者は如何に明白なる法律に由りて文學及び修辭學の敎師たるを禁せられしか、彼ポクトリナス如何に此の法律に甘從して、爾の由つて以て赤子の舌に能辨を與ふる所の爾の「言」を棄るより、寧ろ好んで其の言囂しき學校を去りしかを語りしとき、我は彼を大膽なる人として よりは、寧ろ幸福なる人と勸へぬ。其の全然爾に其時を獻ぐる理由を發見したるが故なり。嗚呼是れ實に我が爲さんと渴望せる所なりき。然れども我は猶未だ己の意志の銕鎖に縛はれたりき。敵は固く吾が

意志を捉へ、之を以て銕鎖を作り、之を以て牢く我を縛りあげぬ。蓋は剛愎は肉慾を來し、肉慾の用は習慣を目的し、甘從せられし習慣は必要を生ずればなり。是れ即ち我自ら「吾が銕鎖」と呼ぶ物の連環其なり。此等の連環我を縛りて習慣の苦役に服せしめたり。然るに吾が衷に起り來りし新なる意志、價を受けずして爾に仕へ、爾を樂まんと欲する意志、一の確實なる歡喜は、尙未だ弱くして時と共に硬まりたりし舊き意志を動すに足らざりき。是故に吾が二個の意志、舊きと新しきと、肉的なると靈的なると、恒に我が肉に鬪ひ、其の牟盾吾が靈魂を無能ならしめぬ。

我是に於て肉の慾は靈に逆ひ、靈の慾は肉に逆ふことに就き、吾が往に讀みし所を實驗に由りて會するに至りぬ。我が自我は兩者に在り、唯我が眞の自我は吾が貶す物の中に在らず、吾が褒むる物の中に在るなり。前者に於ては肉に關係する者今は實際我に非ざりき、蓋は茲に在

りては我は本意の行動者にあらずして、寧ろ反意の受難者たるに外ならざりし故なり。尙且我は我に反して習慣に錮はれたる我を有しき、蓋は今自ら見ることを欲せざる我ならんことを、當時我本意より求めたればなり。然れば義罰の罪人に加へらるゝとき、誰か正當に之を怨むことを得ん乎。我亦復び我が己を欺くに慣れたる口實を以て自ら推諉することを得ず、其の口實とは我猶未だ明に眞理を悟らざるが故に、我猶未だ此の世を遺てゝ爾に仕ふる能はずと曰ふ是なり。蓋は是時に當つて我明かに眞理を悟りたればなり、然れども我は猶此の世に繫がれ爾の旗下に屬することを拒み、吾が重負を後に遺さんことを憂ひたり。是は憂ふべき物に非ず、之が爲に己を煩はさんことを憂ふべき物なりけり。是に於て恰も夢中に於けるが如く此の世の重負、我に於て喜ぶべく見えたり。而して吾が爾に對する冥想恰ばも睡眠に掩はれて、寤めんと欲して又寢に落つる人の努力に似たりき。誰も永劫眠らんと欲する者なし、蓋は人皆正當に寤むることを倍善と勸ふればなり。尙且人は其の肢體が惰眠の爲に重かる際には、其の眠を破るを欲せず、其の理性之を責め、時計響きて之を起すも、反りて眠を結ぶを喜ぶ。此の如く我は己の肉慾に狗ふよりも爾を愛する愛に狗ふの信善なるを確實に知りぬといへども。愛は誘へども勝つこと能はず、肉慾は我を樂ませて我を繫ぎぬ。

「眠る所の汝醒めて死より興きよ、然らば基督汝を照さん」(弗五〇十四)と、爾の呼びたまふに當りて、我は爾に答ふる能はざりき。有らふる方面より爾は其の「言」の眞なること示したまへりき、是故に我が爲し得る所は鈍く拙なき此の答のみ、「嗚呼主よ今に、我今に、我に一時の猶豫を與へたまへ」。然れども吾が「今に、今に」は何等の今を有すること無く、一時は反つて多時を證せり。我徒に內なる人に從ひて神の法を樂しめり、然るに吾が肢體に在る他の法、吾が心の法と戰ひ、我を伏せ我を虜にして、

吾が肢體の中に在る所の罪の法に服はしめぬ、罪の法とは習慣の專制なり。心は其の意志に反して、此の習慣の爲めに曳かれ且執へられぬ。尙且至當と謂はざるべからず、蓋は此の心本意に出でゝ此の習慣を作りたればなり。嗚呼我窮しめる人なる哉。此の死の體より我を能く救はん者は誰ぞや、吾が主イエスキリストに由れる爾の恩寵の外誰ぞや。

第六章

ポンチシアナス、埃及の僧アントニーの傳を語る。

嗚呼主、吾が援助者、吾が救拯者、我今爾の如何にして我を救ひ、我が然く固く捉へられたりし性慾の羈絆と、俗事の苦役より我を解放したまひしかを語りて、爾の名の前に告白せんとす。我今快々として樂まず、吾

が日常の生活に從ひ、日日爾に向ひて嘆息したりき。我又己が沉吟せる重負の下に在る事務の閑ある毎に敎會に臨めりき。アリピアスも亦我と與なりき。彼は今助役の職務の第三任期に由りて其の合法的義務より解かれて、其の經驗を售らんとて、新參の顧客を待てり。恰も我が敎師として傳授し得べき演說の技能を售れるが如し。キプリヂアスも亦吾人の中最も親密なる同盟者の一人、ミランの人にして文典の敎授なるエレカンダスの下に講師の位置を承けて、以て吾人に對する其の愛情を證したり。此のエレカンダスは忠信なる同盟者の必要に遭際し友誼の權利を以て吾人の伴侶の一人の助力を要求せしなりき。

是故にキプリテアスを誘ひしものは進達の欲望に非ざりき。何となれば彼若文學の敎授に固着するを擇みたりしならば、更に多額の報酬を受くべかりし故なり。然れども彼は己の愛に憑へられし要求を拒

むべくは、餘りに心の優しき朋友なりき。尙且彼は最も賢く己を持して、此の世の大家の知遇を避けたり。是れ其の己の心を動かすこと無からん爲なり。彼は己の自由を保ち、冥想、讀書、又哲學の講義を聽問する爲、成るべく多時の閑暇を存せんと欲せしなりき。

當時一日チプリデアスが故ありて臨席し居らざりしとき、ポンチシアナスなる者アリピアスと我とを吾人同人の家に訪ひ來れり。彼は亞弗利加人なりしかば吾が同國人なりしなり。彼或る要求を持して來れり、我等一同坐し且談じき。彼吾人の前に將棋盤あり其の上に一卷の書在るを見て、取り上げて之を開き、其の使徒パウロの書なるを見て大に驚けり。蓋は彼が見んと期せし所は、吾が煩はしき修辭學の手帖の一なりしが故なり。彼破顏微笑して我を見、然く不意に此書を看出せしこと、殊に獨り我が卓上にて之を看出せしことの如何に己に喜ばしきかを吾人に語れり。何となれば彼は忠信なる基督信者にして、敎

會に於て長き祈禱を捧げつゝ、吾人の神なる爾の前に、每々俯伏したればなり。我は彼に其の聖書の爲に多分の時間を費せしことを答へ、而して此の答は彼を催してアントニイなる者の事を語り出さしめたり。是は埃及の僧にして、其名は爾の衆僕との爲に、高く崇められし所なり、唯我此時に至るまで未だ嘗て耳にせしことなかりしのみ。彼吾が不知を發見して、其の說話を開展し發め、斯かる偉人を吾人の曾て知らざるを怪み、徐に其の偉大なりし所以を吾人に示しぬ。

眞の信仰なる正統敎會の懷より起りて、殆と吾人の同時代に然く斬新に顯はされ、然く十分に立證せられたる爾の奇跡の譚話に對して、吾人は驚異を以て傾耳せざる能はざりき。吾人は交も等しく相駭けり、アリピアスと我は其の譚話の異常なりしが故、ポンチシアナスは吾人が未だ曾て之を聞かざりし故なりき。彼は語を移して盛なる修道院、神の美妙に到達するの道、曠野に於て實を結べる獨身生活等に就て語り

ぬ。是れ皆吾人に新なる異聞なりき。ミランにも亦市の城壁の外に一の修道院あり、兄弟なる善男之に充溢し、彼のアムブロースは即ち彼等の養父なりき。尙且吾人は嘗て此かる事物あることを耳にせざりき。彼は猶も語を進め、吾人は唯之を靜聽せりき。是に於て彼は催されて其の嘗てトレベス〔伊太利の一州〕に在りし時、起りし逸事を語り出せり。彼と其の朋輩の三人と、トレベスに在りしとき、――時の皇帝曲馬場の午後の演戲を見んとて駐在したまひき、――相携へて市の城壁の下なる花園に出でゝ散歩したり、其中二人、行より離れて獨り往き、無心に一戸の家屋に入りぬ。此の家は爾の僕たる者天國を己の有とせる所の心の貧しき聖徒の住む所なりき。彼等此處にアントニーの傳を記せる一卷の書を發見したり。

其の一人偶然に之を讀み初めたり、其の讀むに隨ひて、彼の靈魂、俄然靈火に打たれたり。彼即時に寺院的生活に身を投じ、爾の爲めに其の世

間的勤務を一變せんと思ひ興せり。彼は內務省の官吏の一なりき、彼は一旦神聖なる愛と嚴肅なる恥辱とに充たされ、己に對して赫怒を發したるかの如く、其の友を諦視して曰く、「友よ吾人は全體此の日日の努力を以て、何等の目的を求めつゝあり乎、吾人の慾望せる所果して是れ何物乎、此の勤務の爲に獲ましと待望せるも物は、抑も何乎、吾人は皇宮に於て皇帝の友誼以上の何物をか獲べき希望を懷き得る乎。脆弱ならずや此の獲物、危險を以て圍まれたらずや、如何なる危險を攀緣して、更に層倍の危險に登らざるべからず。而して何の時にか成功を期すべき、之に反して我若好まば即時に神の友となり得るを」。

彼斯く語りて其の新生の沉痛に腸を斷ちつゝ、再び其の書卷に返れり。彼讀み往くまにまに爾の見るを得たまふ所の彼の內なる人全く轉はりて、彼の心世間より遠離せられてき。幾もなく事實に顯はれたるが如し。蓋は彼之を讀むに暴海の如き心を以てし幾度となく沉吟した

るが、尙且向上の道を攀ぢ、固く其の決心を定めたり。是に於て彼は終に從容として其友に謂つて曰く、我今斷じて世望に背き、神に仕へんと心を決しぬ。我即刻即席此事に着手せんとす、君設し吾が例に倣はずとも、我に反對すること勿れ。他は之に答へて曰く、「善い哉言や其の奉仕は貴くして、其の報賞は大なり。我相携へて君と共に兄弟たらん、是に於て齊く爾の屬となり、一切を棄てゝ爾に從はん決心を以て、己の費を以て城廓を建てたり」（自力を以て堅信を得たるの意）幾も無く花園の他方を歩きたりしポンチシアナスと其の伴侶と、其の見失へる同人を尋ねつゝ、此の家に到着し、茲に彼等を發見して、日既に沒したれば歸るべしと彼等に逼りぬ。然れども二友は彼等に語るに、然かく不思議に其の心の底より起りて形體を成したる所の此の決心を以てし、其の彼等と同に返るを辞するを、惡意に取ること勿らんことを請へりき。

ポンチシアナス語りて是に至るに及んで嘆息して曰く、「然れば其進路

を變ふる能はざりし吾人は、相與に涙を揮ひぬ。彼等の爲に泣きしに非ず自身の爲に泣きたりしなり。而して止むべきに非ざれば吾人は其の潔き決心の爲に彼等を賀し、己等自身を其の祈禱の中に薦めて彼等二人が天に擧げられたる心を以て其の家に留まりし同時に、吾人二人は地の上に其の心を曳ずりつゝ皇宮に返り往きたり」と曰へり。此等の二人は與に約婚の士なりき、其妻たるべかりし二人の處女も、其の情人の模範を慕ひて其貞潔を爾に獻げし。

第七章

ポシチシアナスの譚話如何に彼の心を貫きしか。

如上是れポシチシアナスの語る所の說話なりき。彼の說話しつゝありし間、主爾は斷へず我を吾が目の前に向けたまへりき。我は己を實

際吾が背の上に置き居たりき。是れ我自ら己を見ることを好まざりし故なり。然るに今爾我を吾が目の前に据へたまへり。是故に我は己の如何に醜惡なりしか、我が如何に不具に、不潔に、斑點あり、膿潰せるかを見き。我之を見て震慄せりき。尙且我何處に己を遁れ得しか、若我自ら己を見るを務めざる時は、ポンチシアナスの說話再び我を捉へ、爾再び吾が畫像を我が前に掲げ、吾が眼をして吾が眞貌を視せしめ給ひき。是れ我が己の不義を發見して、之を嫌惡せんが爲なり。我吾が不義を知りてき、而も知らざる爲を爲し、之を見ざる態を裝ひて之を忘れぬ。然れども彼の二人の友に對する吾が愛愈熱し來る刹那、我が己に對する嫌惡の念愈深く切なるを感じぬ、蓋は爾の救拯の聖手に全然己を投入せし健全なる彼の決心、猶吾が耳底に響きつゝありし故なり。回顧すれば我が十九の年に當つて、始てシセロの「ホーテンシャス」を讀み、智慧の研究へと云ふ召命を聞きし其日以來、幾何の年——恐らく滿

十二年——を徒費せし乎。吾が明白なる義務は、地上の快樂を賤み、智慧を得るの幸福を追ひ求むべくありき。單之を追ひ求むる事が、——之を得ると言はず——世界の有ふる珍寶、一切の王國を得るよりも優り、一切肉體の快樂よりも優る、設や此等の諸物が唯一言の價として持し去らるべかりしとはいへ。而も尙且我は徒に時を費しつゝありき。嗚呼我憫むべき青年なるかな、我青春の發端に於て爾に願ふに眞潔の恩賜を以てせりき。然も我は「我に貞正と自制とを與へたまへ、然れど正義を以てしたまふ勿れ」と曰へり。蓋は我爾の直に之を聽き、直に我が滿足するを許されんことを求めて、根絕せられんことをば願はざる、吾が此の情慾の病を治したまはんことを虞れし故なり。我不虔なる謬信の惡道に彷徨せりき。是れ我が之を正當と思惟せしが爲ならず、單だ之を他の敎義の代りに之を擇み取りし故なり。我此等の敎義を何等莊重なる反省をも加へず、唯怒に乘じて之を棄てたり。我自ら媚びて

曰く我が日又一日世俗と其の希望とを拋ちて、獨爾にのみ事ふるを遷延するの理由は、我が猶未だ何等確實なる目的を發見するを得ざりしに在りと。而も日は遂に來れり。此日我は自ら己の目前に自ら赤裸に露はされぬ。冷酷なる良心の聲我を責めて曰く、「爾の舌今安に在り乎、汝は恒に曰はざりし乎、不確實なる眞理の爲には虛妄の重荷を拋つべきに非ずと。見よ此の眞理は確實なり。而も汝其の重荷の下に蹋(せくじ)めるは何故ぞや。之に反して穿鑿に身を疲らさす研窮の爲に、十年の歲月を費さゞりし彼等は、今自由なる双肩より自由の羽翼を暢ばせるに非ずや」。

ポンチシアナスが語り續けりし間恐るべき羞辱は、然かく吾が靈魂を咬み且之れを亂しき。彼既に其の譚話を畢へ、吾が家に來りし用事を果して去れり。而も我如何に己を難せし乎、我如何に鋭銛なる道理を以て吾が靈魂を鞭笞し、之をして爾に從はんとする吾が努力に從はしめんと爲したりし乎。然も彼は肯せざりき。辨疏をすら之を爲すことを肯せざりき。一切の議論は我皆之を試みて、其の缺點を發見せりき。尙且執拗なる不安を以て之を拒絕せりき。己を消耗して死に至らしむる所の惡習慣より痛く遁るゝ終極は、反りて是れ死なりしかの如く恐怖しつゝ。

第八章

彼花園に往く、花園にて彼に何が成りし乎。

我は內心の密室に於て、己の靈魂に對する此の絕望的悶着の爲、而も心も不安に耐えず、アリピアスを襲ひて叫ぶらく「吾人は如何に爲らんとする乎、吾人が聞し彼の譚話は抑も何を意味せりとするぞ、愚なる者は立ちて自ら勵みて天國を取れり。一切無情なる學問を懷ける吾人は

——如何に血肉の中に轉輾せる乎を見よ。吾人は彼等愚かなる者が鄉導を爲すが故に、躊躇すべき乎。若吾人自ら鄉導する能はずとせば隨行すべからざる乎」と。我は殆と我が言ふ所を知らずして駈け出で、彼れが無言の驚愕を以て訝り見るに委ねたりき。蓋は吾が聲は恒に變はり、吾が面目音色は、吾が言語より一倍鮮明に吾が意識を發表したりければなり。

吾人の寓居の前に當つて、一頃の花園ある在りき。吾人の之に出入するの自由なる、猶寓居の全屋に於ける如くなりき。蓋は其の家主茲に住み居らざりし故なり。吾が胸臆の動搖は我を追ひて此の花園に往かしめたり。此處には我己に對して企てたる決鬪を、獨爾のみ能く豫見したまへりし其の結果に到着するまでは、何等之を妨げ得る者無ければなりき。我が狂せるは救を得ん爲、我が死に滅せるは生を受げんが爲なりき。我が如何なる惡物なりしかを、我自ら之を知りき、頓て如

何なる善物となるべかりしか、我未だ之を知らざりき。此故に我此の花園に遁れ來れり、思ひきや歩一歩我を迹ねてアリピアスの追ひ來つるとは。蓋は彼に告げざる秘密は我に有らざりしかは、彼我が斯かる不幸に際して、如何で我を看過すを得ん乎。是に於て吾人は能くする限り家に遠かりて坐せりき。我は心に苦吟しつゝ、自憤の激昂の爲に全體震へりき。是は嗚呼吾が神爾の意志と契約とに決然投入する能はざりしが故なり。然も尙且吾が凡の骨は此ぞ即ち道なりしこと、有りと有らふる道の中、最も善き道なりしこと、此の道に到らんに何等舟車又は行歩の必要、あらざることを叫べりき。蓋は其の距離彼の家よりして吾人の坐せる此所に至るまでも無ければなり。

然り此の道を往きて約束の地に到ることは、往くべき意志と全く一なり。然れば此の意志は强固にして純一なる意志ならざるべからず。此處に彼處に皷翼する所の破羽の胡蝶の如く、忽ち一說を聞いて奮起

し、忽ち一説に遭ひて退轉するが如くなるべからざるなり。最後に、此の激切なる因循の最中に、我は人往々意志する所の多數の事物を爲したり。然も一も之を成就することを得ざりき。蓋は此等の事業が手足を失ひたればなり。蓋は此等の事業が手足の爲に疲やされ、若くは或る他の事故の爲に廢せられし故なり。若我吾が髮毛を抉り、又吾が額を打ち、又吾が膝の邊に吾が兩手を抱くとせんに、是れ我が之を爲さんと意志するが故なりき。尙且神經吾が命令に從はざりしならば吾が意志は徒事なりしならん。當時我は意志と、行ふべき能力と一ならざりし許多の事物を爲し、尙且己の爲に限なく望ましかるべく見えたる所の惟一事を爲すことを怠れりき。是は久しき前に我が之を意志すべき能力を有ちたる當なりし物なり。蓋は久しき前に我正に之を意志せんことを意志すべき當なりし故なり。何となれば意志の能力即ち是れ行爲の能力なればなり、然も尙且我之

を爲すこと能はざりしなり。是故に吾が肉體は吾が靈魂の最も微き慾望には容易に之に服從して、即時に之に順應して、其の手足をば動かせども、之に反して吾が靈魂は己の一大決心、唯之を行ふべく決すれば即ち足る所の一大決心を行ふ爲に、怪くも己自身を助くる能はざりしなり。

第九章

何が故に心は自ら己に命ずる時に服從せざる乎。

此の奇怪なる違睽は安んぞ、又何が故に存せりし乎、爾の慈悲の光を照らし我を容して問はしめよ。我若或は此の答を人類の責罰てふ闇黑の中、アダムの子輩の悔恨の半夜の中に發見し得べき歟と。焉んぞ、又何が故に此の違睽は存せるか、心、身に命ずれば茲に即時の順應あり、心、

心に命ずれば茲に忽ち反逆あり。心手に命じて動かしむれば、其の辨理の便捷なる、其の命令と遂行とを、殆ど區別する能はざるなり。心は即ち心なり、手は即ち身なり。心、心に意志すべく命ずれば、其の一物なるに管らず、心、心に聽かざらんとす。焉んぞ、又何が故に此の違睽は存せる。心意志すべく命ずと我言ふ、其の意志するに非ざれば命せざらんこと論無し、尙且其の命令の無力なるこそ怪むべけれ。

嗚呼是れ他なし彼其の心十全に意志せざるなり。是故に又十全に命せざるなり。其の命ずるや其の意志する範圍に於てす、故に其の意志せざる範圍に於ては其の命令は行はれざるなり。夫意志の命ずる所は一個の意志の在るべきことより以外に、他の意志の在るべからざる事なり。蓋其の命ずる所の意志は十全なる意志に非ざること審かなり。是故に其の意志は、命ずる所の意志其物に非ざるなり。〔意は命ずる意志と命せらるゝ意志と別物なるが故に一、命ずれども他は聽かず

と曰ふなり〕蓋は若其の命せる其の者が十分の意志なりせば其自身に在れとすらも命せざるならん、蓋は其の既に在るが故なり。是故に此の「意」ども行はずと云ふ事は、何等變則たることなし。唯惡習の爲に壓倒せられたる心の病にして、其の眞理の爲に興され（痊され）たらんには、全然興り來るを得ざる物なり。是故に二個の意志我に在り、是れ其の二者の一が十全ならざるが故なり〔十全なれば一意となる〕、而して二者の一は各他の有たざる所を有す。〔肉慾を逐げんと欲する、意志、靈性を立てんと欲する意志是れ各、他に無き所を有するなり〕。

第十章

反對せる兩意あるが故に、反對せる兩性の存在を主張する所のマニ教者を駁擊す。

思慮の作用に二個の意志あるを觀て、善性と惡性と反對せる二個の心あることを主張する所の彼等靈魂の誘惑者、虛妄を語る徒輩をして、神よ爾の前より滅亡せしめよ。然り彼等は滅亡するなり。彼等自身其の此の如き惡觀念を懷ける間は惡なり、尙且眞理を見て之に歸依せば彼等も亦善となるべし。爾の使徒彼等にも斯く言ふべければなり、曰く、「汝等先には闇かりしかど今主に由りて光れり」蓋此等マニ教徒は主によりて光ることを願はず、自ら光らんことを願ひ、靈魂の本質を神の本質なりと妄想し、其の本來よりも更に闇き者となれりき。蓋は彼等は其の恐るべき高慢に由りて、爾即ち、世に來り、凡の人を光被す所の眞の

光なる爾より、遙に遠かりし故なり。爾の宣ぶ所を見て自ら恥ぢて赤面せよ、彼に近づきて光を受けよ、然らば汝等の面羞づること無けん。我今宿昔の願に隨ひ、直に主、吾が神に仕ふべきか否かを考慮せるに當り、之を意志せし者は誰ぞ、之を意志する能はざりし者は誰ぞや。我、即ち我自身に非ざりし乎。十全に意志する能はざりし者我なり。十全に意志せざる能はざりし者も亦我なり。是故に我正に己と戰ひ、己の爲に引き擘かれたり。其の爭鬪は固より吾が意志に反きたりき、然れども此の爭鬪は第二の心の現在を證せず、獨我に在る一物の刑罰を受けし者なるを證せり。是故に之を興せし者は復た我に在らず、獨我に在る所の罪、即ち我がアダムの子なるが故に一層自然なりし所の罪の罰なり。蓋は若反對する意志あるほど許多反對の人性あらば、二個に限らず更に許多の心有らざるべからじ。若茲に人ありて、彼等の敎會に詣るべき乎若くは劇場に往くべき乎を

考慮せりとせんに、彼等は必ずや叫びて曰はん、「見よ彼は二個の性を有せり、善者は彼を吾人に誘ひ、惡者は彼を誘ひ返す、蓋は若然らずんば彼が此の相爭ふ意志の中間に於ける躊躇を如何に說明せんとする乎」と。然れども我は言はん、二個の意志均く惡し、彼を彼等に誘ふ所の其も、彼を劇場に誘ひ返す所の其と異るなしと。彼等は自然に己の方面に誘ふを善意と思へり。然れども吾が黨の一人が劇場に往くべき乎、己の敎會に參るべき乎、此の二個の意志の間に惑へりと想へ、——彼等は言ふべき所に惑はん、彼等は心に忌みつゝも吾人の敎會に人を誘ふ意志も、彼等自身の諸敎師に誘ひ、之に附屬せしむる意志も、均しく善なりと謂ふべき歟。然らざれば二個の惡性二個の惡心、一人の衷に戰へると を許ざるべからず、是に至つて彼等の得意の敎理、一は善他は惡と稱する所の二元論も地に落ちたりと謂ふべし。然らざれば彼等は須らく眞理に歸順し、一人考慮するに當り、一の靈魂が數個意志の反對の爲に

震撼せらるゝことを拒絕するを休めざるべからず。彼等をして、二個の意志が一人の衷に相戰ふに當り、一は善、一は惡なる二個の心が二個の反對せる原素に由りて造られたる二個反對の實體の上に、爭鬪せりと曰へるが如き虛妄を再び唱ふる勿らしめよ。

嗚呼主、眞理の神、爾は此の輩を責め、之を詰り之を悟したまふ、蓋は人若し毒を以て殺すべきか、若くは劍に以てすべきかを思慮する時の如き、兩意共に惡なるべければなり。此地を奪ふべきか、若くは彼地かと思慮する時、放蕩以て快樂を買ふべき乎、貪慾以て其の金錢を貯ふべき乎、若一日兩所に觀玩あらば、劇場に往くべき乎、曲馬場を觀るべき乎、更に或る家宅を奪ふべき好機會あるべく、彼に第三の進路開かれ、更に同樣奸姪を行ふの好機會あるべく、第四までも開かれんには、其の孰れを取るべき乎と思慮する時に、兩個の意志均しく惡なるべければなり。

此等一切の目的同時に自身を現前し、一切平同に慾望すべく、尙且一齊

に之を獲取する能はざることを想へ、此場合に於て彼等は四個の相戰ふ意志を以て一心を四分す。若慾望の目的猶之より多からば、更に多く分つべきなり。尙且彼等自ら此等の一切が特異なる實體なることを言はざるなり。其の善なる意志に於ける亦然り、我試に問はんとす、誠實なる快樂を得んが爲には使徒を讀むべき乎、若くは詩篇なる乎、若くは福音書に基いて談ずべき乎と。彼等必ず答へて曰はん、各皆善なりと、此の如く皆平同に快樂にして、皆同時に於て快樂ならば果して如何、吾人が孰を擇ぶべき乎を考ふるに當りて特異の意志交も心を攪亂せざる乎、是皆悉く善なり。然も彼等は其の一が選擇せられ、其の意志の復許多の目的の中に分かれず其の全力、獨其の一の上に傾注せらるるに至るまで相爭ふを免れざるなり。是故に又永生、上より吾人を牽引し、地上の快樂下より誘ひ墮さんとするに當り、靈魂は其の全力を擧げて其の一をも意志せず、又他をも意志すること無し。然も尙且同一

靈魂なり、其の然く煩悶し攪亂せらるゝ所以の理は、眞理の上善を愛せしむるに當りて、習慣が上惡を拋つを許さゝらんと欲するに在るのみ。

第十一章

肉と靈と如何にアウガスチンの衷に鬪ひしか。

是に於て我は中心疚しくして懊惱するに耐へざりき、蓋は前よりも一等痛酷に己を責め、己が銕鎖の中に展轉、反側し、全然之を斷んとするに至ればなり。然も現時は殆ど絕へんばかりなりとはいへ、其は猶ほ固く我を縛りき。嗚呼主爾吾が心底に在して我を督し無慈悲なる慈悲に由り、恐怖と羞辱との鞭笞以て我に逼りたまひき。是れ我が復び過ること無からん爲、擦れ疲れたる吾が銕鎖の、絕ゆるに非らで、再び其の力を得て前より頑く我を縛らること無からん爲なり。我心中時々恒

に謂つて曰く、「今斷行せよ、今斷行せよ」と。我が此言を爲す時や我は決心の端に臨み、決行の點に立てり、尙且決行せざるなり。然れども我復た吾が前日の冷淡に轉落することなく、反りて直と其の岸に立つて息を繼ぎたりき。我更に、更に之を試み、一寸、一寸逼り近れり。我殆ど目的に觸り、殆ど之に達せんとせりき。尙且觸らず達せざりき、我が猶死に死すること恐れ、生に生くるを避けし故なり。紅の染みたる上惡の、未だ經驗せざる上善よりも我が衷に强かりし故なり。我をして一變せしめんとする其の一刹那が、愈近づくに隨つて、愈我を恐怖せしむ。然れども是は復び我を斥け又は我を拉くこと能はず、唯我が心を寒からしむるのみ。

瑣事の瑣事、虛妄の虛妄は、即ち是れ吾が往時の妾婦我を引返さんとする事なり。彼等齊く吾が肉の衣を捉へて耳語して曰く、「御身能く妾等を去らしむべき乎、妾等若一朝去らば、未來永劫復御身を見るべからず。

其時限り彼も此も永劫御身に禁ぜらるべし」と。嗚呼吾が神是は何を意味せり乎。彼等の謂はゆる「彼も此も」とは如何なる意味乎、嗚呼神爾の慈悲を以て彼等の謂へりし不德と羞恥とより爾の僕の靈魂を誰りたまへ。彼等の言一たび去つて、彼等の魔力頓に一半を滅せしやう見えたり。彼等再び我に對つて公然面を會はすること能はず、獨背後に在りて怨言し、我が立ちて行んとする時、固く吾が裳を牽き、我をして唯後を顧みさせんとしつるのみ。尙且吾が優柔不斷なるや、彼等をして吾が忽然身を脫して自由を得、我を召ぶ者の聲を認めて走るを妨げしむるを免れざりき。蓋は屈强なる習慣彼等を助けて、我に試問し、「汝能く我等と離れて生活し得べしと思ふや」と曰ひし故なり。

然れども習慣の聲亦終に其の力を喪ひたり。蓋は我が面を向けて遁れんと欲したる方面に於て平穩に、快活に、而して放肆ならざる、制欲の貞潔なる威儀、其の曙光を吾の上に射し向け、徐に我を招きて疑はずし

て來るべきことを告げ、好き模範盈ちたる、其の敬虔なる双手を擴げて我を歡迎し、抱懷せんとしたればなりき。我は童男童女、又青年及び有らふる齡の僧侶の高尚なる隊伍、老いたる寡婦、老いたる處女等を見んと欲すれば見るを得たりき。彼等は盡く禁欲の人なりき、而も石婦に非ず、其主にして又其夫なる爾に由りて生まれし諸の歡喜てふ小兒の母なりき。彼〔制慾〕挑戰的微笑を以て我を見恰も斯く曰へる者の如くなり、曰く、「卿は此等の人々の爲せるが如く爲す能はざる乎。是れ豈彼等の力なりし乎、彼等に勇氣を與へしは主なる彼等の神の力ならざりし乎、主なる彼等の神我をも彼等に與へたまへり。卿は卿の力に由りて立つ、是故に立たざるなり。卿第主に投せよ、畏るゝ勿れ、彼は逡巡することなし、然れば卿は仆るゝこと無し、敢て己を彼に委ねよ、彼必ず卿を支へ卿を救はん」と。我は獨り赤面しぬ、蓋は是に至つて猶虛妄の女の耳語を聽き、我猶窓に恁りたればなり。是に於て彼再び言へるよう

見ゆ、曰く、「卿の耳を閉ぢ、地に屬ける卿が不潔なる肢體の言を聽くこと勿れ。是れ其の肢體の制抑せられん爲なり。彼等は快樂に就て語る、然れども主たる卿の神の律法を守らざるなり」と、我が己と戰ふに當り、吾が心底より叱咤し來る議論、抑も此の如くなりき。アリピアスは恒に吾が傍に在り、吾が此の奇怪なる不安の結果如何と默し視たりき。

第十二章

彼の使徒の聲と語とに由りて、彼は全く改心したり。

而て深甚の回顧が秘密なる記憶の中より吾が有らふる罪惡の黑雲を抉摘し出し、之を吾が心眼の前に堆積せし時、俄然として吾が心頭に回飈起り、涕淚滂沱たるを禁ずる能はざりき。我是に於て立つてアリピアスを殘し、涕淚と號哭との盡るを待てりき。蓋は獨身は一倍淚に適